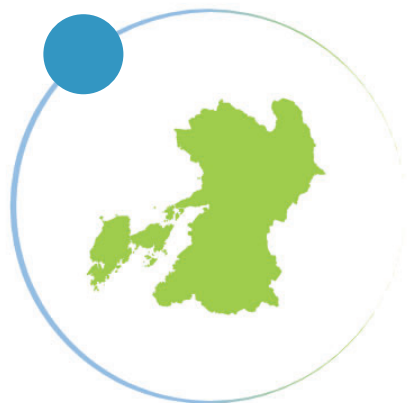




熊本県地域医療支援機構
熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

令和7年度 夏季・冬季地域医療 特別実習報告書



熊本県地域医療支援機構
熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座



目次

はじめに	1
1 地域医療特別実習とは	2
1.実習の概要	
2.実習の目標とねらい	
3.実習の構成	
4.事前学習課題	
2 夏季地域医療特別実習	5
1.概要	5
2.グループワーク	9
3.全体発表会	20
4.実習の様子	30
5.夏季実習の評価と振り返り	36
6.夏季実習参加学生の感想	55
3 冬季地域医療特別実習	62
1.概要	62
2.実習の様子	65
3.冬季実習の評価と振り返り	68
4.冬季実習参加学生の感想	72
4 教員・外部講師コメント	73
5 その他	77
おわりに	80

はじめに

日頃より、熊本大学病院地域医療支援センターならびに地域医療・総合診療実践学寄附講座の活動に対し、格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。本年度の地域医療特別実習の活動報告書を作成しましたので、お届けいたします。ご高覧いただけたら、幸いに存じます。

言うまでもなく、近年の人口減少や高齢化の進展、医療資源の地域偏在など、地域医療を取り巻く環境は変化し続けています。特に地方においては、限られた医療資源の中で住民の健康と生活を支えていくことは、重要な課題の一つです。地域の実情を理解し、住民の方々の生活や文化に寄り添った医療を担うことのできる医師の育成は、今後ますます重要になるものと考えています。当地域医療支援センターでは、そのような人材育成を目的として、熊本県医師修学資金の貸与を受けている熊本大学医学部学生、および熊本県出身の自治医科大学学生を主な対象に、熊本県内各地で地域医療特別実習を、コロナ禍の数年間を除き、2009年度より実施してきました。医療機関のみならず、行政機関や福祉施設などを実際に訪ねることで、地域医療の実情を多角的に理解し、地域に根ざした医療の在り方について学ぶ貴重な機会となっています。

本年度は、夏季および冬季の2回にわたり実施しました。夏季実習は、水俣・芦北地域（水俣市、芦北町、津奈木町）において実施し、過去最高の参加者数となる41名の学生が参加しました。水俣市の歴史や地域における環境問題への取り組みについて学び、医療が地域社会や環境と密接に関わりながら住民の健康を支えていることへの理解を深めました。また、学生がフレイル予防をテーマとした紙芝居を作成し、高齢者の方々に向けて健康づくりの啓発を行うなど、地域住民との交流を通じて地域医療の実践的な側面を体験する機会となりました。

冬季実習は、玉名地域（玉名市、和水町）において実施し、3名の学生が参加しました。災害発生時における地域の医療提供体制や行政との連携について学び、平時からの多職種連携の重要性について理解を深めました。さらに高齢者福祉施設を訪問し、地域における高齢者福祉の拠点としての役割や、医療・介護・行政が連携して地域住民の生活を支えている実情について学ぶことができました。

これらの実習を通して、学生は地域医療の現状や課題を知るとともに、地域で暮らす人々の生活や歴史、文化に触れることで、通常の授業や実習では得ることのできない、貴重な学びの機会を得ることができました。地域医療への理解を深め、将来地域で医療に携わる際の視野を広げる契機となったことは、間違いありません。

本実習は、地域の自治体や医療機関、関係施設の皆さまのご協力があって実施することができる教育活動です。本実習の実施にあたり多大なるご協力を賜りました水俣市、芦北町、津奈木町、また玉名市、和水町の皆さまをはじめ、訪問先の医療機関、行政機関、関係施設の皆さまに心より感謝申し上げます。あわせて、熊本県健康福祉部医療政策課の皆さま、地域医療支援センターならびに地域医療・総合診療実践学寄附講座の教員およびスタッフの皆さまのご尽力に深く敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

本報告書が、私たちの地域医療教育の取り組みをご理解いただく一助となり、今後の熊本県内の地域医療の発展に少しでも寄与することを願っております。今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院
総合診療科 教授
地域医療支援センター センター長
地域医療・総合診療実践学寄附講座

松井 邦彦

1 地域医療特別実習とは

1. 実習の概要

「地域医療特別実習」は、熊本大学病院 地域医療支援センター及び地域医療・総合診療実践学寄附講座が、熊本県地域医療支援機構と連携し実施しています。熊本県医師修学資金貸与学生及び熊本県出身の自治医科大学医学部生を主な対象とし、将来、熊本県の地域医療に携わるにあたって、県内の地域（熊本市を除く）を訪れ『地域を知る』ことに重点を置いた企画・構成となっております。

本実習では、実地でのフィールドワーク等を通して、地域の医療・保健・福祉等の現状や課題について学びます。参加学生が多方面から地域の理解を深め、地域との関係性を築くとともに、地域医療に取り組む学生の意欲を高め、将来のキャリア形成に資することができるような内容となるよう取り組んでいます。

また、コロナ禍以前は夏季に2泊3日で実施しておりましたが、大学カリキュラムや大会出場等の理由により参加が難しい学生がいることから、より多くの学生が参加できるように、令和5年度からは1泊2日の日程で夏季と冬季の年2回実施しております。今年度は、夏季は水俣・芦北地域（水俣市、芦北町、津奈木町）、冬季は玉名地域（玉名市、和水町）で実習を行いました。

2. 実習の目標とねらい

この実習では、「一般目標」と「行動目標」を設定し、実習を通して「地域を知る」ことの重要性を「実習の手引き・ワークブック」に明確に示しています。これにより、学生の主体的な学習意欲を高めることをねらっています。

実習の目標

<一般目標>

- ・ 地域を知り、地域との関係性を構築する
- ・ 将来、地域に求められる医師となる

<行動目標>

- ・ 地域住民と交流する
- ・ 地域の現状を様々な視点から知る
- ・ 地域の課題の解決・改善策について発表する
- ・ 学生間で交流を深める
- ・ 地域で求められる医師像について考察する

実習のねらい

- ・ 地域医療関係者として、地域から自分たちが期待されていることを自覚する
- ・ 地域特性や課題に応じた「地域包括ケア」「自助」「互助」「共助」の現場を体験する
- ・ 医療・福祉・行政サービスの提供／利用のされ方の実際をみる
- ・ コミュニティのなかで、それらのサービスを提供する側の視点と、生活者として利用する側の視点の違いを知る
- ・ 地域によって異なる健康課題があること等を分析することにより、将来、医療者としてどのような地域でも求められる健康問題に携わるための示唆を得る

3. 実習の構成

この実習では、はじめに主催側から学生に対して事前課題が提示されます。学生はその課題を手がかりに、地域医療ゼミや自己学習を通して実習地域について調査を行い、調べた内容を班内で共有しながら、地域が抱える課題を見出していきます。

その後、フィールドワーク実習において、地域診断の視点から課題に取り組みます。事前学習や実習を通して得られた情報や気づきを整理・まとめ、最後に班ごとに成果発表を行います。発表内容は、参加学生だけでなく、教員や地域の医療従事者、行政関係者の方々と共有し、地域の課題や改善策について、関係者全員で考える機会としています。



4. 事前学習課題

参加学生には次の5つの項目に関する事前学習課題を提示し、事前に実習訪問地域について調査することで、地域の特色についてより深く理解できるようにしています。

① 地域の特徴

自身がフィールドワークを行う地域の特徴について、次の6項目に沿って調査。

- ・該当する2次医療圏とその特徴
- ・地理・地勢の特徴、自然環境・気候など
- ・歴史文化的な沿革、背景、特徴、祭り、風土、風習、生活様式など
- ・経済、主産業、労働人口の構成
- ・交通のインフラ（共通資本）と移動手段など
- ・教育、政治・行政・役所、消防、それらの出先公共機関など

② 人口動態、寿命、死亡、罹患・有病資料

量的データ（統計、アンケート調査結果などの数値化されたデータ）を用いて、国の人口動態統計、自治体の統計、各種保健統計、アンケート調査等のデータにアクセスし、フィールドワークを行うエリアを自分の住む地域と都道府県、全国の値と比較する。該当する2次医療圏とその特徴

＜人口動態（総人口と推移、出生・死亡、3区分別人口割合、世帯数と割合）＞

- ・人口の推移・増減率、将来推計人口、3区分人口割合（高齢化率など）とその推移、世帯数と割合
- ・他の地域との比較から見てくるこのエリアの特徴

＜有病・罹患・主要死因＞

- ・主要死因の構成と順位、その推移
- ・注目する各種疾患の死亡率など
- ・他の地域との比較から見てくるこのエリアの特徴

③ 寿命、余命、健康寿命

＜平均寿命、健康寿命とその推移＞

- ・平均寿命・健康寿命の推移
- ・主な年齢の平均余命など
- ・他の地域との比較から見てくるこのエリアの特徴

④ 健康増進や疾病予防・政策

＜健康増進や疾病予防、関連要因に対する政策や財政、それらのデータ＞

- ・各種住民検診及び検診受診率
- ・医療費とその推移
- ・介護認定状況の推移
- ・喫煙率、健康増進、特定の疾患予防、指標
- ・健康増進、疾病予防への取組やその指標
（感染症やワクチン、母子学校保健、障がい者自立支援、精神保健）
- ・他の地域にない取り組み、他の地域と比較した特徴

⑤ 地域包括ケア・自助や互助

＜地域包括ケアの事例や取り組み＞

- ・地域包括ケアの取り組みやその事例

＜自助・互助の事例や取り組み＞

- ・自助グループ
- ・地域のボランティアなどの自助・共助・互助グループ
- ・サロンや集いの場
- ・レクリエーション
- ・娯楽

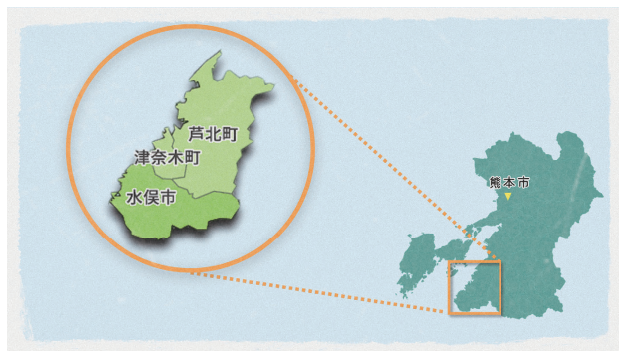
2 夏季地域医療特別実習

1. 概要

今年度の夏季地域医療特別実習（以下「夏季実習」）は、水俣・芦北地域において実施しました。

水俣市、芦北町、津奈木町の各自治体をはじめ、医療機関、高齢者等福祉施設、地域振興・まちづくり関係施設、そして地域住民の皆さまのご協力のもと、フィールドワークやグループ活動など、充実した実習プログラムを展開することができました。実習2日目に行われた全体発表会では、各班が夏季実習の成果を共有し、学びを深める良い機会となりました。

また、地域視察では「水俣病資料館」と「熊本県環境センター」の2施設を訪問しました。水俣病資料館では、伝え手（語り部）である坂本直充様より、水俣病患者との交流を通して受け取られた想いについてお話を伺いました。熊本県環境センターでは、年々深刻化する環境問題や、水俣市が取り組む環境モデル都市・SDGs都市としての活動状況などについて説明を受けました。なお、実習の詳細については、次頁以降にまとめています。



- 実施日程
2025年8月19日（火）、8月20日（水）
- 実習地域
水俣・芦北地域（水俣市・芦北町、津奈木町）
- 参加学生
熊本県医師修学資金貸与学生 29名
自治医科大学医学部生 12名

● 実習スケジュール

1日目 8/19（火）

時間	行程	詳細（場所等）
8:00	・ 集合	熊本大学病院
8:15	・ 移動	熊本市 → 水俣市
10:00	・ 講話	水俣市立総合医療センター 講話①：「地域活動における保健所の役割」 水俣保健所 所長 林田 由美 氏 講話②：「水俣市立総合医療センターについて」 水俣市立総合医療センター 院長 阿部 道雄 先生
12:00	・ フィールドワーク	A班：水俣市A（山間部）、B班：水俣市B（市街地） C班：水俣市C（臨海部）、D班：津奈木町、 E班：芦北町
17:00	・ 帰着・休憩	宿舎
18:30	・ 懇談会・意見交換会	湯の児温泉 海と夕やけ コンベンションホール「湯の児」
20:00	・ 全体発表会準備	
23:00	・ 就寝	

2日目 8/20（水）

時間	行程	詳細（場所等）
7:00	・ 起床・朝食	
8:20	・ 移動	宿舎 → 水俣市立総合医療センター
8:50	・ 全体発表会	水俣市立総合医療センター
11:40	・ 移動	水俣市立総合医療センター → 昼食会場
12:10	・ ランチミーティング	福田農場
13:30	・ 移動	昼食会場 → 地域視察
13:30	・ 地域視察①	水俣病資料館：伝え手（語り部）による講話、館内見学
14:50	・ 地域視察②	熊本環境センター：講話、館内見学
15:30	・ 移動	水俣市 → 熊本市
17:30	・ 帰着・解散	熊本大学病院

● 実習参加者および実習協力機関等

▼ 参加学生

＜熊本県医師修学資金貸与学生＞

- 鹿児島大学医学部
6年...高吉 晃輔
- 熊本大学医学部
5年...岡本 健太朗、永野 七海、福田 真也、増永 菜央
3年...山口 竜蔵、田中 遥子、荒川 彩乃、末永 義博、下川 真奈、酒井 真琴、
西山 智哉、西山 泰生、梅田 哲也
2年...山田 華奈、村田 英利佳、福山 陽斗、吉富 才華、松村 洸希、松下 晴翔、
中田 敦之
1年...坂梨 仁彦、山下 楓夏、坂田 小春、松野 聡一郎、外村 恵斗、向田 匠吾、
百崎 葉子、中村 光彩

＜自治医科大学医学部生（熊本県出身者）＞

- 5年...萩尾 悠生、松川 朋樹、直井 優斗
- 4年...前川 裕貴
- 3年...吉村 大寿、宮城 涼羽、陶山 泰智
- 2年...松永 彩花、田形 賢志朗
- 1年...隈部 礼奈、古川 裕貴、佐藤 美澤

▼ 随行スタッフ等

＜熊本大学病院＞

- 地域医療支援センター
センター長 松井 邦彦（総合診療科 教授）
特任講師 高柳 宏史
特任助教 堤 龍子
地域医療支援コーディネーター 無田 英昭、川添 光芳
女性医師復職支援コーディネーター 原田 淳子
事務補佐員 横手 友紀子
- 地域医療・総合診療実践学寄附講座
特任教授 荒木 智
特任助教 佐土原 道人、北村 泰斗
事務補佐員 山並 美緒、木口 知佳子
- 総合診療科
医員 松田 圭史、田添 英典
医局員 松岡 隼平（熊本南病院 総合診療科）、足立 瑛彦（天草市立河浦病院）

＜熊本県健康福祉部 医療政策課＞

- 課長 神西 良三 参事 三井 栄美
- 課長補佐 小山 耕太 主事 山本 陽菜
- 主幹 井戸 竜裕

▼ 実習協力機関・施設及び ご協力いただいた皆さま（懇談会参加者を含む）

＜水俣市立総合医療センター＞

- 院長 阿部 道雄
- 事務部総務課 係長 橋迫 司郎
- 脳神経内科 倉 翔叡（地域枠卒業生医師）
- 消化器内科 鶴田 恵理（地域枠卒業生医師）

＜水俣市＞

- 副市長 小林 信也
- 福祉環境部長 今別府 隆宏
- いきいき健康課 高齢介護支援室 次長 山口 千亜妃

＜芦北町＞

- 副町長 松本 俊造
- 住民生活課 課長補佐 田中 英之

＜津奈木町＞

- 町長 山田 豊隆
- 副町長 林田 洋三
- ほけん福祉課 課長補佐 川野 裕司、ほけん福祉課 荒川 曉美

＜水俣市芦北郡市医師会＞

- 会長 眞鍋 哲郎

＜熊本県へき地医療医師の会＞

- 脇田 富雄（上天草総合病院 院長）
- 田浦 尚宏（人吉医療センター 副院長）

＜高齢者等福祉施設＞

- 小規模多機能介護施設 くぎのの里、小規模多機能事業所 ほっとはうす、
共同生活援助施設おるげ・のあ、特別養護老人ホーム あけぼの苑、
特別養護老人ホーム 五松園

＜医療機関＞

- 水俣市立総合医療センター附属 久木野診療所、白梅病院・介護医療院、
井上医院、深水医院

＜地域振興・まちづくり関係施設＞

- 水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館、国立水俣病総合研究センター、
水俣環境アカデミア、NPO法人 ばらん家

＜その他の施設＞

- 水俣病資料館、熊本環境センター

＜その他＞

- 湯の児温泉 海とタヤけ、福田農場、あらせ会館、レストラン ナポレオン、
芦北うたせ直売食堂 えび庵、喜楽食堂、近畿日本ツーリスト、熊本電気鉄道（株）、
大洋タクシー、君島タクシー、水俣タクシー

2. グループワーク

● フィールドワーク

学生は訪問地域ごとに、A班（水俣市山間部）、B班（水俣市市街地）、C班（水俣市臨海部）、D班（津奈木町）、E班（芦北町）の5班に分かれてグループワークを行い、事前学習からフィールドワーク、全体発表まで一貫してメンバーと協力して実習に取り組みました。

実習1日目に取り組んだフィールドワークでは、主に「医療機関」、「高齢者等福祉施設」、「地域振興・まちづくり関係施設」を訪問しました。各施設のご協力のもと、有意義なフィールドワークを行うことができました。



A班 水俣市（山間部）



メンバー

- ・高吉 晃輔 ・増永 菜央 ・前川 祐貴 ・陶山 泰智 ・宮城 涼羽
- ・西山 泰生 ・坂田 小春 ・外村 恵斗 ・百崎 葉子

スケジュール

時間	行程
13: 30～14: 00	<診療所見学> ・久木野診療所
14: 10～14: 50	<高齢者等福祉施設見学> 小規模多機能型居宅介護 くぎのの里
15: 00～16: 30	<地域振興・まちづくり関連施設見学> 水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館

実習施設MAP



地理院地図(電子国土WEB)写真タイルを加工して作成

水俣市立総合医療センター附属 久木野診療所

水俣市立総合医療センターの橋迫様より、同センター附属の久木野診療所をご案内いただき、診療体制や患者の利用状況などについてご説明を伺いました。また、限られた設備の中で診療内容にも制約があるものの、地域の人々にとって重要な役割を担っていること等をお話しいただきました。



小規模多機能型居宅介護 くぎのの里

小規模多機能型居宅介護「くぎのの里」の管理者 前田 様より、施設の周辺地域や社会資源の状況、施設利用者の特徴や要支援状況などについてご説明をいただきました。その後、施設内をご案内いただき、入所室や共同スペースを見学させていただきました。



水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館

「水俣市久木野ふるさとセンター愛林館」館長 沢畑 様より、古くから地域住民の生活を支えている寒川水源や、伝統的な石積みで築かれ棚田をご案内いただきながら、地域資源を活かした村おこしの工夫や、自然環境と地域文化を守りながら地域活性化を進める取り組みについてお話を伺いました。

B班 水俣市（市街地）



メンバー

- ・ 萩尾 悠生
- ・ 酒井 真琴
- ・ 吉富 才華
- ・ 松村 洸希
- ・ 中田 敦之
- ・ 隈部 礼奈
- ・ 松野 総一郎
- ・ 古川 裕貴

スケジュール

時間	行程
13: 10～14: 10	<高齢者等福祉施設見学> ・ 共同生活援助施設 おるげ・のあ
14: 20～15: 20	<病院見学> ・ 深水医院
15: 30～16: 40	<地域振興・まちづくり関連施設見学> ・ 水俣環境アカデミア

実習施設MAP



地理院地図(電子国土WEB)写真タイルを加工して作成

共同生活援助施設 おるげ・のあ

「共同生活援助施設 おるげ・のあ」を運営する社会福祉法人さかえの杜理事長 坂本 様より、施設設立の経緯やこれまでの歩み、水俣病患者への支援の取り組みについてお話しいただきました。その後、施設内をご案内いただき、入所者のプライバシーに配慮した居室の構造や設備についてご説明を伺いました。



深水医院

「深水医院」の深水院長より、かつて外科医としてご活躍された経験を交えながら、地域医療において求められる知識や技術の習得、そして患者を総合的に診ることの大切さについてお話をいただきました。その後、深水院長による心臓エコー検査の診察の様子を見学させていただきました。また、海江田事務長より院内をご案内いただき、設備などについてご説明を伺いました。



水俣環境アカデミア

「水俣環境アカデミア」の古賀所長より、水俣病の原因となるメチル水銀の発生から人体への影響に至るまでのメカニズムや、「環境モデル都市づくり宣言」に基づくごみの高度分別収集の取り組み、さらに環境保全と持続可能な地域づくりに向けた活動についてご説明をいただきました。また、同施設が国内外に向けて実施している環境問題の啓発活動の様子についてもお話を伺いました。



C班 水俣市（臨海部）



メンバー

- ・直井 優斗
- ・福田 真也
- ・梅田 哲也
- ・下川 真奈
- ・松下 晴翔
- ・佐藤 美澤
- ・坂梨 仁彦
- ・中村 光彩

スケジュール

時間	行程
13: 10～14: 10	<高齢者等福祉施設見学> ・ 小規模多機能事業所 ほっとはうす
14: 20～15: 20	<病院・高齢者等福祉施設見学> ・ 白梅病院・介護医療院
15: 40～16: 40	<研究施設見学> ・ 国立水俣病総合研究センター (水俣総合医療センター内 メグセンター)

実習施設MAP



地理院地図(電子国土WEB)写真タイルを加工して作成

小規模多機能事業所 ほっとはうす

「小規模多機能事業所 ほっとはうす」を運営する社会福祉法人さかえの杜理事長 坂本 様より、施設設立の経緯やこれまでの歩み、水俣病患者への支援の取組みについてお話しいただきました。その後、施設内をご案内いただき、実際に利用者の方が作業をされている現場を見学させていただきました。



白梅病院・介護医療院

「白梅病院・介護医療院」の眞鍋院長より施設内をご案内いただき、病棟や介護医療院の設備、患者・入所者へのサービス提供の様子について説明を受けました。また、院内の環境整備や安全対策の取り組みについてもお話を伺いました。

国立水俣病総合研究センター

「国立水俣病総合研究センター」の中村先生より、水俣市立総合医療センター内に開設されているメグセンターにて、水俣病の症状緩和を目的とした検査法や治療法などについてお話を伺いました。また、MEG（脳磁計）検査やMRI検査などの機器を見学させていただき、実際にNIRS検査の体験もさせていただきました。



D班 津奈木町



メンバー

- ・松川 朋樹
- ・永野 七海
- ・田中 遥子
- ・荒川 彩乃
- ・西田 智哉
- ・末永 義博
- ・田形 賢志朗
- ・向田 匠吾

スケジュール

時間	行程
13: 15～13: 45	<講話> ・津奈木町役場
14: 00～15: 00	<高齢者等福祉施設見学> ・特別養護老人ホーム あけぼの苑
15: 15～16: 45	<地域振興・まちづくり関連施設見学> ・つなぎ美術館 等

実習施設MAP



地理院地図(電子国土WEB)写真スタイルを加工して作成

津奈木町役場

津奈木町社会福祉協議会の芝原様、津奈木町ほけん福祉課の日野様および成川様より、津奈木町における高齢者施策の現状や課題、施設の状況、さらに住民が安心して暮らせるまちづくりや環境整備の取り組み状況についてご説明をいただきました。



特別養護老人ホーム あけぼの苑

特別養護老人ホーム「あけぼの苑」の施設長 瀧山 様より施設の概要についてご説明をいただいた後、学生たちが「フレイル」をテーマに作成した紙芝居を入所者の皆さまに披露しました。皆さんは関心を持って説明に耳を傾けてくださいました。その後、施設内の見学も行い、設備やサービス提供の環境について理解を深めることができました。

つなぎ美術館

津奈木美術館では、館内の見学を行い、収蔵されている多くのアート作品に触れました。その後、同館に併設されたモノレールに乗車し、重盤岩にある舞鶴城公園展望所を訪れて、不知火海と津奈木町の街並みを一望しました。



E班 芦北町



メンバー

- 岡本 健太郎
- 山口 竜蔵
- 吉村 大寿
- 福山 陽斗
- 松永 彩花
- 村田 英利佳
- 山田 華奈
- 山下 楓夏

スケジュール

時間	行程
13: 30～14: 20	<福祉事業施設> ・ NPO法人ばらん家 こども食堂
14: 30～15: 20	<病院見学> ・ 井上医院
15: 30～16: 30	<高齢者福祉施設見学> ・ 特別養護老人ホーム 五松園

実習施設MAP



地理院地図(電子国土地WEB)写真スタイルを加工して作成

NPO法人 ばらん家

「NPO法人 ばらん家」の理事長 松原様より、障がいを持つ方への就労支援の体制や、地域の清掃活動、さとうきび栽培などを通じた地域交流の取り組みなど、ばらん家の活動についてお話を伺いました。



井上医院

「井上医院」の井上院長より、医療機関として地域で担う役割や、疾患だけでなく患者さん全体を診る大切さ、そして医療・保健・福祉の連携の仕組みについてお話を伺いました。また、院内をご案内いただき、実際の診察室や各種設備などを見学させていただきました。

特別養護老人ホーム 五松園

特別養護老人ホーム「五松園」にて、学生たちが「フレイル」をテーマに作成した紙芝居を入所者の皆さまに披露しました。皆さんは関心を持って説明に耳を傾けてくださいました。その後、施設長早川様より施設内をご案内いただき、地域の医療機関との連携やサービスの提供状況についてお話を伺いました。



3. 全体発表会

水俣市立総合医療センターのご協力のもと、参加学生による実習成果の全体発表会を実施しました。本発表会では、事前学習で調査・考察した内容に加え、実習を通して学んだことや得られた成果、さらに一連の学習を通じて見てきた地域の課題とその解決策について、各班が取りまとめて発表しました。

各班の発表後には、他の班の学生や随員スタッフから多くの質問や意見が寄せられ、活発な意見交換が行われました。

最後に、本実習の主催者を代表して、荒木副センター長より全体発表会および今回の夏季実習について講評をいただきました。



▶ 発表スライド：A班

2025年度夏季地域医療特別実習 成果発表



A班 水俣市

高吉晃輔 増永菜央 前川祐貴 陶山泰智 宮城涼羽
西山泰生 坂田小春 外村恵斗 百崎葉子

A班 主な訪問先



久木野診療所



診療日は火曜日午前と金曜日午前の2日
現在は3人の医師が交代で診療を行なっている
診療所利用者は昔の半分ほどにまで減り、1日4,5人ほどの患者さんが訪れる。少ない時は0人の時も！
診療所が抱える患者さんの数は30人程度
簡易的な血液検査や尿検査しか診療所では行えないが、地域住民にとっては安心して暮らすための重要な存在！！

久木野診療所



診療日は火曜日午前と金曜日午前の2日
現在は3人の医師が交代で診療を行なっている
診療所利用者は昔の半分ほどにまで減り、1日4,5人ほどの患者さんが訪れる。少ない時は0人の時も！
診療所が抱える患者さんの数は30人程度
簡易的な血液検査や尿検査しか診療所では行えないが、地域住民にとっては安心して暮らすための重要な存在！！

事前学習や保健所の講話で分かったこと

水俣市の特徴や課題（ネット調査より）
・高齢化率が40%近くと全国平均を大きく上回る
・若年層の人口流出と少子化
・医療・介護人材の不足
・公共交通の不便さによる移動困難者の増加
・水俣市の歴史を踏まえた健康・環境問題への継続的対応
保健所の講話からわかる水俣市の課題
・地域間での医療資源や公共サービスの偏在
・自然災害（豪雨・地震）に対するインフラの脆弱性
地域ごとの特徴的な取り組み
・環境アカデミア：環境教育・研究拠点
・小規模多機能施設・共同生活援助施設：高齢者・障害者の生活支援
・地域病院・診療所：多科併設で住民の基礎医療を支える

A班 行程

12:00	～	13:00	夏島地区病院
13:20	～	13:30	移動
13:50	～	14:00	久木野診療所 小規模多機能施設「くぎの里」
14:00	～	14:10	移動
14:10	～	14:30	小規模多機能施設「くぎの里」の里 小規模多機能施設「くぎの里」
14:30	～	14:50	移動
15:00	～	15:30	小規模多機能施設「くぎの里」の里 小規模多機能施設「くぎの里」
15:30	～	15:40	移動

くぎの里(小規模多機能施設)



状況に応じてサービスを組み合わせられる！
短時間利用OK！
時間や回数の制限なし！

くぎの里(小規模多機能施設)



状況に応じてサービスを組み合わせられる！
短時間利用OK！
時間や回数の制限なし！

愛林館



愛林館は、水俣市久木野の村おこし施設！
綺麗な水でつくられる、美味しいお米が魅力！

館長さん

結論・考察・感想・謝辞など

●実習を通じて、地域を知ることができたか

水俣市では、棚田や畑を用いて地産地消の暮らしを行っていた。また人口が少なく分地帯の人と顔馴染みになりやすいので孤独死のリスクが減りお互いを気にかけることができていた。
昔の人から引き継がれる棚田や線路の跡地を今も有効に活用していた。

●感想、謝辞

水俣市に実際に足を運ぶことで水俣市の地域の現状をより深く知ることができた。

今回は、お忙しい中私たちのために時間を割いて水俣市の実態について教えてくださりありがとうございました。

地域の課題と提言

課題1：僻地に赴く医師不足

↳ シフト制にすることでキャリアへの不安の解消
・助成金を給与に上乗せ

課題2：高齢化による棚田の耕作放棄

↳ 現地に行って手伝って応援
・お米を買って応援

課題3：オンライン診療をサポートする看護師への報酬が支払われない

↳ 国単位で法整備によるシステム構築が必要。

夏季地域医療特別実習「肥後狂句」

第1編

のさりもん 水俣湾に 光ゆれる

第2編

うろんころん 久木野の棚田 こらよかばい！

第3編

なつたなか 3種のカレー 地の物で

▶ 発表スライド：B班

2025年度夏季地域医療特別実習 成果発表



B班（水俣市浜町周辺）

グループメンバー名：

萩尾 悠生 酒井 真琴
吉富 才華 松村 洸希
中田 敦之 隈部 礼奈
松野 聡一郎 古川 裕貴

B班 主な訪問先



共同生活援助施設 ホットハウス おるげ・のあ

・地域の中で自分らしく暮らせるように街中に作られた共同生活援助施設

・胎児性水俣病患者に対して、身体及び精神的に個別化された適切な支援を提供している。

・施設内にはトイレや風呂、食堂など生活に必要なものが多数配備されている。



共同生活援助施設 ホットハウス おるげ・のあ



↑ホットハウスにて岩塩の選別を行う利用者の方
災害・緊急時に迅速に避難できる滑り台 →

事前学習や保健所の講話で分かったこと

水俣市の特徴や課題（ネット調査より）

- ・高齢化率が40%近くと全国平均を大きく上回る
- ・若年層の人口流出と少子化
- ・医療・介護人材の不足
- ・公共交通の不便さによる移動困難者の増加
- ・水俣市の歴史を踏まえた健康・環境問題への継続的対応

対応

保健所の講話からわかる水俣市の特徴や課題

- ・地域間での医療資源や公共サービスの偏在
- ・自然災害（豪雨・地震）に対するインフラの脆弱性

地域ごとの特徴的な取り組み

- ・環境アカデミア：環境教育・研究拠点
- ・小規模多機能施設・共同生活援助施設：高齢者・障害者の生活支援

生活支援

- ・地域病院・診療所：多科併設で住民の基礎医療を支える

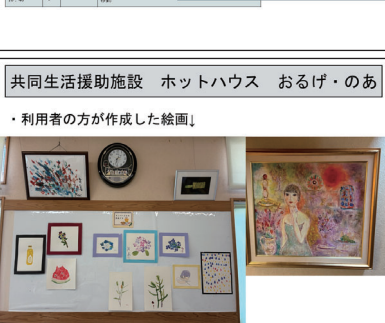
B班 行程

12:00	～	13:00	昼食
13:00	～	13:10	移動
13:10	～	14:10	移動 ・小規模多機能事業所 ぽっぽうす ・共同生活援助施設 おるげ・のあ 水俣市市民センター 市民ホール
14:10	～	14:20	移動
14:20	～	15:20	移動 ・深水医院 水俣市市民センター 市民ホール
15:20	～	15:30	移動
15:30	～	16:00	移動 ・水俣環境アカデミア 水俣市市民センター 市民ホール
16:00	～	16:10	移動



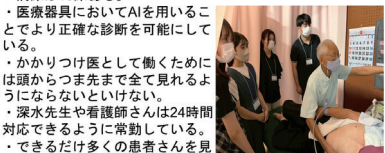
深水医院

・病床は18床ある。
・医療器具においてAIを用いることでより正確な診断を可能にしている。
・かかりつけ医として働くためには頭からつま先まで全て見れるようにならないといけない。
・深水先生や看護師さんは24時間対応できるように常勤している。
・できるだけ多くの患者さんを見るためにたくさんの医療器具をもっている。



深水医院

・病床は18床ある。
・医療器具においてAIを用いることでより正確な診断を可能にしている。
・かかりつけ医として働くためには頭からつま先まで全て見れるようにならないといけない。
・深水先生や看護師さんは24時間対応できるように常勤している。
・できるだけ多くの患者さんを見るためにたくさんの医療器具をもっている。



↑ワクチンを保存する冷蔵庫

↑内視鏡の洗浄機

結論・感想

今回の実習を通じて、水俣地域の医療の現場を見ることができた

事前学習で調べたことに加えて、現場で働く医療従事者の考え、思いに触れることができた

地域に密着して患者さんや施設の利用者さんとの深い信頼関係を築いていることが感じられた。

一方で水俣を超え、日本の各地や海外に向けて発信しているということも学ぶことができた。

内側と外側2方向に向けた活動が水俣地域の特色だと感じた。

水俣環境アカデミア

・環境モデル都市づくりやSDGs未来都市としての取り組みを発信している。

・国内外の大学や研究機関と連携することにより事業を展開している。
・地域への貢献としては、無農薬、有機肥料によるお茶の栽培などの水俣の持続的域づくりをやっている。

・課題としては過疎化、少子化に伴う人口減少や新たな地域産業の振興。



地域の課題と提言

課題1：少子高齢化の加速

それに対する解決策

- ・産婦人科の医師数を偏在を考慮しながら、ある程度増やす
- ・社会、経済的に子育てしやすい環境を作る。

課題2：災害時の対応

それに対する解決策

- ・これまでに発生した災害時の事例をもとに、包括的な被災者、被災者家族へのケアを行う
- ⇒救急治療、遺体の対応など

課題3：水俣病への誤解

それに対する解決策

水俣病に関する教育(遺伝しない、感染しない)を広げる

夏季地域医療特別実習「肥後狂句」



①「のうならんごつ 青か海ば 守りたい」

②「うろんころ どこへ行っても 人の声」



▶ 発表スライド：D班



D班 主な訪問先



①津奈木町役場

・津奈木町役場は基本理念として、みんなでささえあいずつと安心して暮らせる、元気なつなぎのため四つの目標を掲げている。

- ・安心して暮らしていくための生活支援
- ・いつまでも健康に過ごせる環境の整備
- ・みんながつながるまちづくり
- ・介護保険制度の適切な運営

そのために2つの事業が行われていた。

- ①緊急通報システム
- ②高齢者住宅改造事業



③津奈木美術館

- ・津奈木町政策企画課の福田さんから津奈木町振興計画について説明があった
- ・「人と自然、アートがつながる 希望を持って住めるまち」をテーマとした町づくり
- ・廃校を利用した宿泊可能な大型アート作品



事前学習や保健所の講話で分かったこと

- ・人口減少が続いている
- ・病院数自体は全国平均より多いが、診療科の不足(産科など)が多い
- ・保健所とは母子保健、精神保健、成人保健などを担う機関であり、地域において住民の公衆衛生の向上及び健康増進を目的とした行政機関。
- ・保健所は通常時の健康増進を担うだけでなく、災害時の対応も担っている。
- ・衛生行政の組織は基本的に国、都道府県、市町村の連携だが、労働衛生行政だけは全て国の管轄で行われる。
- ・熊本県には10の二次医療圏がある。

D班 行程

12:30	～	13:30	昼食
13:30	～	13:45	移動
13:45	～	14:45	・津奈木町役場 津奈木町役場(津奈木1-2-2)
14:45	～	15:00	移動
15:00	～	15:00	・特別養護老人ホームあけぼの苑 津奈木町役場(津奈木1-2-2)
15:00	～	15:15	移動
15:15	～	16:45	・つなぎ美術館 2階 津奈木町役場(津奈木1-2-2)
16:45	～		移動

②あけぼの苑

- ・従来型やユニット型の特別養護老人ホーム、短期入所生活介護、通所介護、居宅介護支援、認知症対応型共同生活介護があった。
- ・季節行事やBBQなど入居者さんが楽しめるイベントが多くあった。
- ・老人ホーム特有のクラスター発生時の苦勞や、医療施設との連携の難しさを知った。

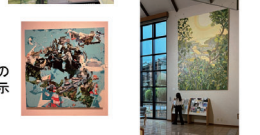


③津奈木美術館

- ・モノレールで重岩を登ると、町と海を一望できた



- ・津奈木町に所蔵のある方の作品が展示されていた



感想

水俣市総合医療センターでは、地域の基幹病院として急性期から在宅まで幅広い医療を支えている姿を学びました。地域住民の健康を守る中核としての役割の大きさを実感しました。

津奈木町役場では、高齢化や人口減少といった地域課題に行政がどのように取り組んでいるのかを知り、医療と行政の連携の大切さを感じました。

あけぼの苑ではフレイルについての発表をしたのですが利用者の笑顔が目立ち、楽しく過ごしていることが印象的でした。

最後に訪れた津奈木美術館では医療機関で身体の健康を促進するのに加え、アートによって心の豊かさや精神面の健康を保つ取り組みが長く続いていることが印象的でした。

地域の課題と提言

課題1：人口減少・少子高齢化
・1950年に9303人だった人口が2021年には4430人にまで減少しており、今後も進む見込み
→解決策：子育て・教育環境の充実を行う。子育て世帯の暮らしやすい生活を支援する

課題2：人口減少 町の外からの移住が少ない
→解決策：旧赤崎小学校を改装したホテル、四季彩(温泉施設)、つなぎ物産ギャラリーなどの魅力を発信していく

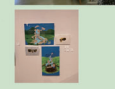
課題3：高齢者の生活
高齢者の要介護4や5の割合が高く、初めて要介護認定を受ける平均年齢が低い、＝介護予防に課題
→解決策：早期発見のために定期的な相談会や検診を開催する

夏季地域医療特別実習「肥後狂句」

第1編
たっしやかなあ 津奈木の声に カモろた



第2編
津奈木町 海も山もアート のさりもん



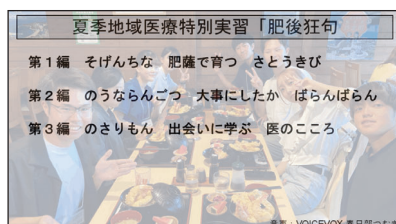
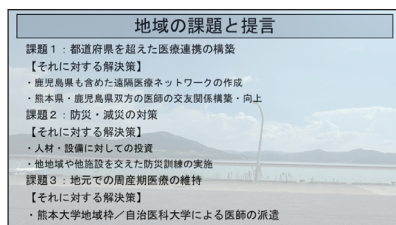
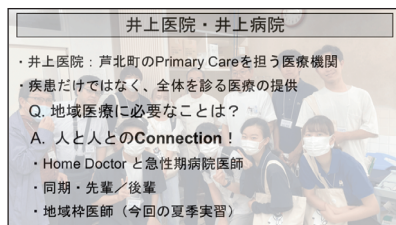
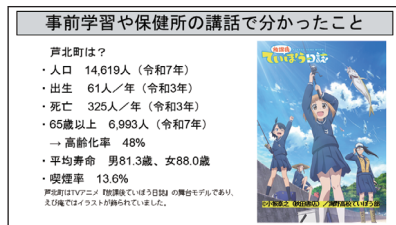
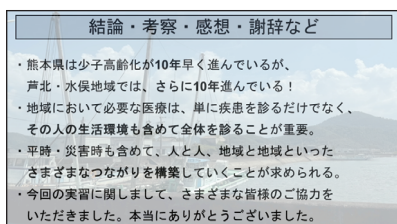
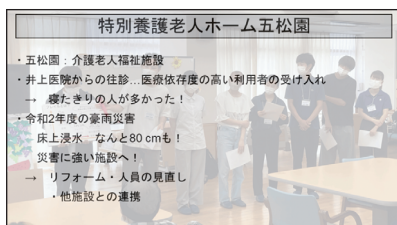
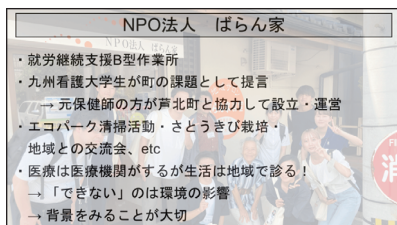
第3編
のうならんごっ 水俣の恵み 太刀魚に



謝辞



▶ 発表スライド：E班



4. 実習の様子

講話

水俣市立総合医療センターに会場をお借りして、はじめに水俣保健所 林田 由美 所長から「地域保健活動における保健所の役割」をテーマに、衛生行政や地域保健の取組や役割、災害等発生時の健康危機管理の重要性などについてお話をいただきました。



続いて、水俣市立総合医療センター 阿部 道雄 院長から、病院の概要や医療設備、立地する地域の特色、地域で担う役割などについてお話をいただきました。



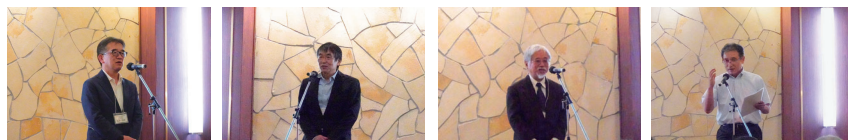
懇談会・意見交換会

今回の実習実施に当たり、ご協力を賜った自治体や病院関係者の皆さまをお招きしての懇談会・意見交換会を行いました。

水俣市、芦北町、津奈木町の各市町の代表者にもご出席いただき、水俣市立総合医療センター 阿部 院長、熊本県へき地医療医師の会 脇田先生（上天草総合病院）をはじめ、ご来賓の皆さまから学生に向けた激励の言葉をいただきました。

また、学生によるフォトボイスの発表や、熊本県医師修学資金貸与学生及び自治医科大学大学生それぞれの代表学生から挨拶も行われました。

学生は、ご参加いただいた自治体や病院関係者の皆さま、水俣・芦北地域の医療に従事する先輩医師等と積極的に会話を交わし交流を深めました。お忙しいところご出席くださいました、関係者の皆さま誠にありがとうございました。



松井センター長

水俣市 小林副市長

水俣市立総合医療センター
阿部院長

熊本県へき地医療医師の会
脇田先生



芦北町 松本副町長



津奈木町 山田 町長



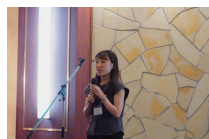
水俣市芦北郡医師会
真鍋会長



学生代表挨拶



地域粋先輩医師挨拶



フォトボイス 発表スライド



(A)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



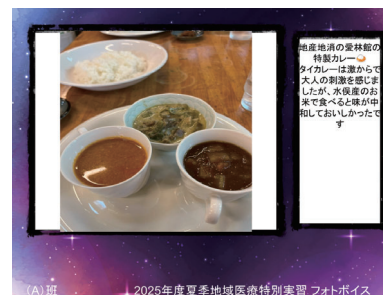
(A)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(A)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(A)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(A)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



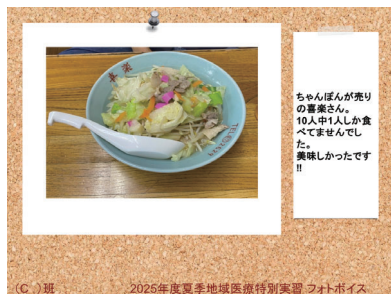
(B)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(B)班

2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(C)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(C)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(D)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(D)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(D)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(D)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



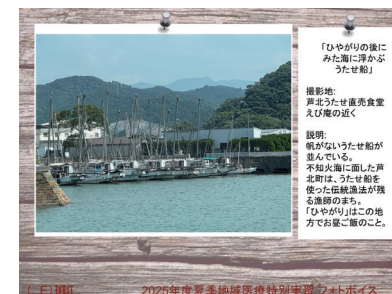
(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス



(E)班 2025年度夏季地域医療特別実習 フォトボイス

地域視察

水俣病史料館では、伝え手の坂本 直充 様から、水俣病患者の方々との交流で受け取った想いについてお話を伺いました。



熊本県環境センターでは、年々深刻化する環境問題の要因や影響、水俣市が取り組む環境モデル都市・SDGs都市の活動状況等についてお話を伺いました。



5. 夏季実習の評価と振り返り

【実施目的】

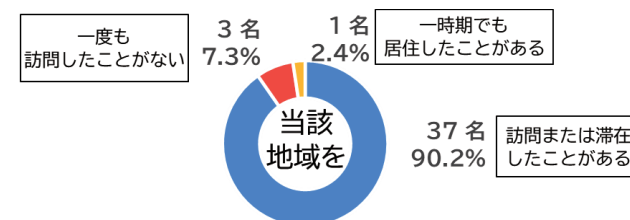
- ・ 夏季地域医療特別実習の教育的効果と「地域を知る」ことができたか検証
- ・ アンケートに回答することによる参加者の自己省察の促進
- ・ 今後の企画や運営の改善のための参考資料

【回答者の構成】

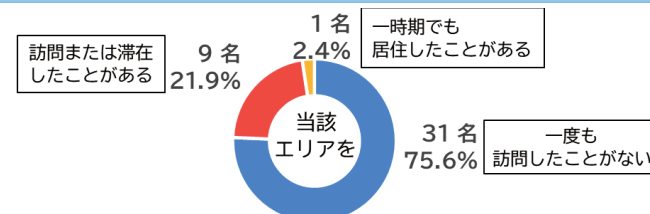
	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
熊本大学	8	7	9		4		28
鹿児島大学						1	1
自治医科大学	3	2	3	1	3		12
計	11	9	12	1	7	1	41

(1) 夏季実習に関するアンケート結果

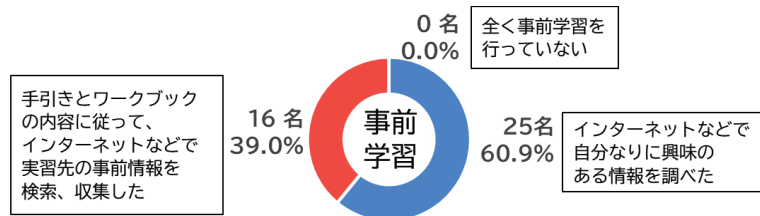
【1】 今回、夏季地域医療特別実習を行った「水俣市・芦北地域（芦北町、津奈木町）」へのこれまでの訪問状況



【2】 自身がフィールドワークで訪れたエリアへのこれまでの訪問状況

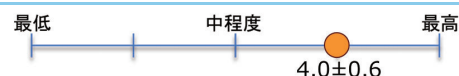


【3】事前学習について、当日参加するまでの状態

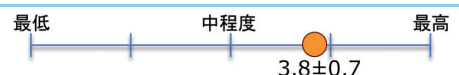


【4】今回の夏季実習に参加したことへの自己評価

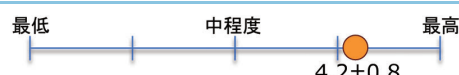
○ 今回の夏季実習に積極的に参加しましたか？



○ 2日間を通じて、討議や意見交換にどの程度参加しましたか？



○ 2日間を通じて、夏季実習を楽しめましたか？

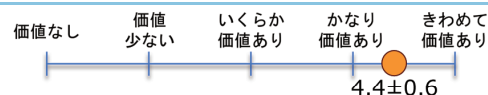


○ 今回の夏季実習で「地域を知る」ことができましたか？

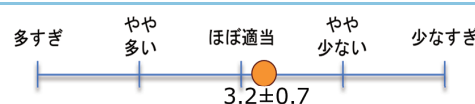


【5】今回の夏季実習に対しての全般的な評価

○ 実習内容の価値について



○ 実習内容に対する時間量について



○ 実習内容の難易度について



○ 今回の夏季実習全体にわたり「良かった」と思われる点

- フィールドワークが班ごとに分かれており、翌日に成果発表があったため、自分が訪れていない地域のことも知ることができた点良かったです。
- 水俣の雰囲気や水俣の病院の様子を伺うことができた点
- 参加人数が多く、さまざまな学生との交流の機会が持てたのではないかと思います。地域医療ゼミにおいて事前に2回顔合わせしており、班のメンバー以外との交流の機会も作ることができたかと思います。
- 時間通りに進行されており、とても段取りが良かった
- フィールドワークにかけられる時間は半日と短かったが、3つも施設を回ってしっかり学習することができてよかった
- 医療だけでなく地域の実態についても学ぶことができた。
- 過疎化が進む水俣地域のさらに田舎の方に行ったことで、産業、暮らし、歴史を含めてよく知れた。
- 将来勤務するであろう医療機関の生の声をお聞きすることができ、また、保健所の方からの講話では現場の問題について事前学習以上に知ることができたこと。また、例年と同じように自治医大の同級生や下級生と交流できたこと。
- 先生方や他校の人と交流出来た。地域医療だけでなく地域についても知ることができたので楽しかった
- 地域を知るという面では芦北水俣に住んでいた自分でも知らないことをたくさん知ることができた。また、フィールドワークでは、地域が抱える問題と密接に関わった医療の現状を知ることができた。
- 熊本大学の地域枠の方々と交流を深めることが出来たこと、また、地域の現状を実際に訪問して知ることが出来たこと。
- 熊本大学の地域枠の方々と交流を深めることが出来たこと、また、地域の現状を実際に訪問して知ることが出来たこと。
- 実際に診療所に行きお医者さんのお話を聞くことができ貴重な体験になりました。
- 興味のあるコースを選べたこと。
- たくさんの場所を訪れることができたこと
- 水俣病に関して語り部さんの話を聞けるなど、経験者の生の声を聞くことができた、医療に関わるだけでなく、地域の自然などにも触れることが出来て地域の魅力をしれてよかった。
- 地域の住民の方や市長、医療センターの方など多くの方々にお会いする機会があったこと
- あまり医療に偏りすぎず、地域の生活にも触れられた点
- 時間に対し内容が充実しており、水俣医療センターやフィールドワーク(私は津奈木町役場、つなぎ美術館、特老あけぼの苑)などを研修することが出来た。水俣芦北地域について医療の面から知ることが出来た。そのほか熊本大地域枠の方との交流も深めることが出来た。
- 地域の課題や現状を知ることができたこと
- 同じ大学の先輩や、他大学の方、先生方と交流することが出来たこと。
- 様々な施設に行けたこと。
- 水俣の実情を知ることができた。特にフィールドワークで実際に自分で歩いたことで、どれぐらいの距離に診療所や介護施設があるかわかり、そこに住んでいる人の生活を体験できた。
- 実習内容もそうですが、他の学年・大学の学生や様々な医療機関や自治体の方々と交流を持てることに、特に大きな価値があると感じています。
- 水俣市総合医療センターでは、取得することができる専門医についてや、県南部の医療について聞くことができてとても勉強になりました。フィールドワークでは病院と施設の連携や、NPO法人の取り組みを見学して、住民と地域のコミュニティをつくっていることが分かりました。色々な分野の施設が見学できて良かったです。また、地域枠卒の医師の先生の話聞いたことは、どのように科を選んだのかなど将来について気になることを尋ねることができてとてもありがたかったです。2日目の地域視察では、水俣の歴史と環境保護のための取り組みについて考える重要な機会になりました。県南部出身なので、地域の様子など、身近に感じることも多くありました。これまでの住民としての視点に加えて、医療者からの視点で見ることができました。

- ・短時間で様々な施設を回れたことで、毎回集中してお話を聞いたり見学したりすることが出来た
- ・自分の行ったことがなかった地域に行くことができ、地域を知ることができたことに加え、その地域で働く人の思いを知ることができて良かった
- ・フィールドワークで、現地の施設関係者の方に直接お話を伺えるのは貴重な経験だった。ネットで調べたりするだけでは知りえない情報を聞けたのはとても良かったと思う。
- ・地域に関わる様々な職種の人の話を聞けてよかった。

○ 今回の夏季実習全体にわたり「芳しくなかった」と思われる点

- ・限られた時間内にスライドを作るのが大変でした。
- ・実習が多く、1つ1つをじっくり見学の時間はなかったと感じた、フォトボイスやプレゼン資料を作る時間が短く仕事を分配するのが難しかったこと
- ・フィールドワークでの各訪問時間が少し短いような気がした。訪問する場所を1つ減らして、もう少しじっくりと観察したり話を聞ける時間を作っても良いと思った
- ・フィールドワークの同じ班同士では他学年や他大学の学生と深く交流できたが、別の班となるとあまり関わりが薄れてしまうこと。
- ・積極性が欠けていた点
- ・熊本大学のカリキュラムが変更となり、臨床実習の期間が伸び、5年生の夏休みが激減しました。臨床実習の補講や就職活動、部活動の大会などで十分な時間がない学生もあり、今後も課題となっていくかと思います。実際、3年生以下の学生も実習に積極的に取り組んでいたことから、実習班のリーダーは比較的時間の余裕のある3-4年生にやってもらった方がいいのではないか、と感じました。
- ・少し日程が過密な部分がありドタバタしてしまったところはあった。
- ・水俣病資料館に資料館において語り部の方の講演を聞くことができ、改めて水俣病の歴史とこのような公害の内容を理解できました。また、他の大学の医学生とも交流ができ、新鮮な体験ができました。
- ・地域特有の課題などについて知ることが出来たこと
- ・熊大生と交流ができた
- ・上天草の院長先生と仲良くなれた。
- ・昨年度は、入浴の時間が夕食前と決まっていたが、今回は自由だったこと。
- ・水俣病環境センターの見学時間が5分ほどと短く、満足に見えなかった。15分ぐらいあってもよかったのでは、と思った。
- ・水俣の環境センターはゆっくり見たかったです
- ・地域の方との交流できる機会は、思っていたより短く感じた。限られた時間をもう少し大事にすればよかったと思った。
- ・班別行動が多かったので別の班の人と交流する機会があまりなかった
- ・時間が足りない。
- ・講話が多めで実際に体験する活動が少なかったこと。
- ・2日目の見学時間が短かった。
- ・集合時間が早い
- ・日程がタイトだった
- ・スケジュールがキツキツだった。
- ・時間がタイトであるため2日目に疲労を感じた点
- ・1日目の夜の休憩時間がもう少し欲しかった
- ・傘を忘れてしまい、濡れそうになったこと
- ・特になし（9）

【6】 今回の夏季実習の構成、企画、運営等の各セッションについて

○ 開催時期・日程・日数について

- ・個人的にはちょうど良かった。
- ・日数はちょうどよかった。
- ・全体的にちょうど良かったと思う。
- ・時期・日程はよかったと思う。
- ・大会にも被らなかったのでありがたかったです。日程、日数もちょうどいいと思います。
- ・ちょうど夏休みだったので参加できてよかった。すべてちょうど良く、楽しく学ぶことができて充実していた。
- ・1泊2日がちょうどよいと感じました。
- ・長すぎず短すぎず、とても良いスケジュールだったと思います。
- ・ちょうど良かったです。2泊以上だと負担が大きいかと思います。
- ・時期、日程、日数どれも丁度良かった
- ・日程及びスケジュールがちょうど良かったです。短時間で多くの場所を訪れる形式が自分には合っていました。
- ・8月20日ごろは大会も終わり、参加しやすく適当であった。
- ・1泊2日はちょうど良かった
- ・ちょうど良い／良い／適当（13）
- ・西医体の直後で疲れが出てしまったので、もう少し遅めだと大変嬉しいです
- ・集合時間が早かった。
- ・適切、お盆明けで例年より遅い方ではあるように感じた
- ・8月20日前後だったことは良かった。1泊2日は少し短く感じた。
- ・適切な時期だったと思う。
- ・短い。
- ・時期や日程は適当だと感じる。今回は、2日目の見学の時間が短く感じたので、2泊3日も良かったのではないかと感じた。
- ・少し遅めだったと思う
- ・とくにない

○ 「夏季地域医療特別実習の手引きとワークブック」について

- ・やるべきことがわかりやすく示されていてよかったと思う。
- ・使いやすかった
- ・事前学習などをするとき、とても役に立った。
- ・早めに紙媒体で配布していただくと、事前学習した内容を実習で活かしやすと感じた。
- ・自分たちが回る施設がどのようなところかを分かりやすく明記されており、見やすかったです。
- ・よくまとめられていたと思う。
- ・内容がまとまっていてよかった。
- ・内容は十分である。
- ・講義資料がQRコードから飛べるようになって見やすかったです。
- ・整理されており使いやすかった
- ・これから何をするかわかりやすく書いてありとても参考になりました。
- ・夏季研修にあたり詳細に情報が載っており大変参考になった。QRでの情報共有が役立った。
- ・実習に取り組み易かったです
- ・研修先の文化や医療の実態を予習することができました。
- ・情報を得られるサイトのリンクが載っていたのがありがたかった
- ・全て簡潔にまとめられており、実習中に疑問に思うことの答えは基本的に記載されているため助かった
- ・事前学習の内容に取り組みやすい説明やつくりになっていた。
- ・カラーで図や表を沢山用いてあり分かりやすかった
- ・見やすかった（2）

- ・至れり尽くせりでとても良いと思います。紙版とタブレットから閲覧できるPDF版との二刀流で使えることも、フィールドワークなどで便利でした。
- ・見やすくとてもよかった。ただ、事前学習欄をもう少し狭めてメモ欄を増やしても良いかと思った。
- ・ページ数が少し多いと感じた。QRコードですぐ確認できるのは良かった。紙の手引きをもらえたのは良かった
- ・事前に紙媒体が欲しかった
- ・事前学習する部分だけでもいいので事前に紙媒体が欲しかった。

○ 「事前学習や課題」について(※自身の取り組み状況にかかわらず)

- ・実習での学びが深まるような内容であったと思う。
- ・フィールドワークをする前に、地域の特徴を知っておくことで実習中の理解度が上がると思う
- ・地域の課題について自ら考えることで、より地域を知ることができた。
- ・発表の際に有用だった
- ・どのような地域なのかイメージを持つことができました
- ・事前に色々調べることで地域を知れるので良いと思う
- ・地域の人口、産業、地形、病院について調べた
- ・事前学習することで水俣のことが少しわかった。
- ・事前学習したことで、学びが深まった。
- ・人口動態や現在の抱える問題など、実際に訪ねる上で重要な知識を事前に知れたのは良かった。
- ・どういう地域か、どんな問題を抱えていて、どのようなことを行なっているのか少しでも知っておくことで、より実習に積極的に参加できるので必要。
- ・事前に水俣について知ることができよかったです。
- ・よい
- ・実習で理解を深めるためには必要だと思う

- ・自分のipadに事前学習で学んだことを書き込んで、当日紙媒体をもらってまた書き写したので、もっと早めに紙媒体をもらうことはできたらいいと考えた。
- ・必要なURL等が提示されており、事前学習がしやすかったです。自身のPCやタブレット端末を持参する学生も多く、学生全員に対しての実習当日の配布は不要かと思います。
- ・最終版をもっと早く出してほしい。研修前にグループLINEで送られてきてびっくりした。
- ・ちょうど良い／良い／適当(3)

- ・自治体のホームページが分かりやすく、またデザインが凝ったものもあり、興味を持ちやすかった。
- ・自分なりに調べて興味を持って実習に望むことが出来て良いと思う
- ・研修先における疑問などを考える機会を与えてくれました。
- ・どこの資料を参考にしたらいいのかなどもあったので調べやすかったです。思ったより量が多かったのも、早めに資料を手に入れられて助かりました。
- ・事前に調べたことを、実際に見てみることで、より理解が深まると思う。
- ・事前課題は少し多いと感じた。事前学習をしたが、詳細なことを調べにも、資料が足りず、深く調べることができないこともあったのが残念だった
- ・地域のかなり詳細な情報を、集めることが求められており、一部収集が難しいものもあった。
- ・事前学習の内容について、調べるのが難しかったり、データが最新のものを見つけるのが難しいところがあった。
- ・調べても出てこず、かといって実習中に触れる訳でもない項目もあった。
- ・参考文献を元に調べたが、項目が多くかなり苦戦した。
- ・正直なところ、実習のスケジュールなどを考えると、若干要求が過大かなという印象もあります。

- ・それぞれの項目を調べるのが大変だった。
- ・課題がおおかった／事前学習の量が多かった／量が少し多いかと思った。

- ・今のままでいいです。
- ・特になし

○ 「フィールドワーク」という方法(地区視診、地域踏査、各所訪問)について

- ・どの班も3箇所ほどで、昨年までと比べて時間の余裕があり、のびのびと勉強ができた、と思います。ご飯も美味しかったです。
- ・自分で歩くことで実際の場の雰囲気もわかるし記憶にも残りやすいから良いと思う。
- ・現場を見ることができるのは非常に意義のあることだと思った、この視察を通して自分が将来、どうあるべきかを考えるいい機会になった
- ・映像等で知るよりも地域を知る、興味を持つきっかけになるため良いと考えた
- ・実際に地域で生活されている方々や医療従事者と触れ合いながらの学習することで、将来の自分をイメージしやすくなった
- ・実際に目で見て各々の職員のかたにお話を聞くことでより理解が深まりました。
- ・地域の方の声を聞いていいと思います
- ・実際にその場所に行って自分の目で見るのでできるので良かったです。水俣ならではの景色や文化に触れたり、現地の方の話を聞いたりしてためになりました。
- ・特定の地域を深く知ることができてよかったと思う。
- ・どういう所かいくらネットで調べても行ってみないと分からないことが多くあるので重要。
- ・様々な場所をグループごとで回ることによって他の地域を短い時間で学ぶことができた
- ・普段自分が行くことのない地域に行くと水俣について深く知ることができました。
- ・実際に歩いて回るのは良いと思う
- ・実際に訪問しないと分からないような地域医療現場だけでなく、地域の状態も知ることが出来たので有意義だった。
- ・実際に自分で見て聞いて学ぶことで、記憶に深く残りました。
- ・今のままでいい／今のままで満足(2)

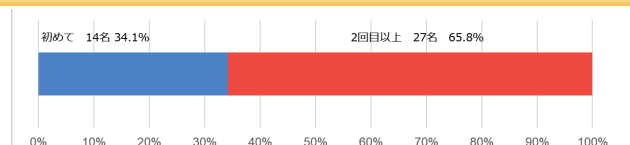
- ・事前のアレンジメントおよび関係各所の方々のご協力に大変感謝しております。行程が事前に詳細に決められていることから、とすれば「フィールドワーク」という言葉から一般的にイメージされる活動よりも受動的になりかねない気もしましたが、フォトボイスの課題があったことで、その「ネタ」を探そうと班員それぞれが見るものすべてにアンテナを張って積極的に取り組むことができていたと思います。
- ・地域全体を知ることが出来て良かった
- ・あまり踏査する時間はなかったが、それでも道中で周りの景色や生活感を目で感じたのは良かった。
- ・実際に見て聞いて学ぶ方法であるため、良いと感じる。D班は、各箇所、適切な時間配分だったと感じる。
- ・現地の雰囲気やそこで働いている方を、近くで見ることができて、新鮮で楽しかった。
- ・実際に見て学ぶことができて良かった
- ・診療所だけでなく、地域の産業、暮らしを支えるところにも訪問できて貴重な体験ができた。
- ・事前に調査していた場所を実際に訪れ、話を聴くことでよりその地域や医療の実情を学習することができると思う。
- ・良いと思う
- ・訪問先で、施設関係者と最初に話して、その後施設見学するという流れの場所があったが、順番としては、施設見学が先の方が質問などもたくさん浮かび、円滑で有意義な話し合いができるのではないかと考えた
- ・事前に調査していた場所を実際に訪れ、話を聴くことでよりその地域や医療の実情を学習することができると思う。
- ・徒歩での移動が暑かった。
- ・とくになし

○ 今後取り上げてもらいたい企画、内容、開催地域の希望など

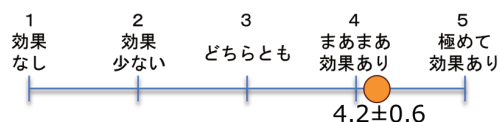
- 施設の方からの話を数十分聞く、という内容が主であり、自分も含めて眠たそうな学生・居眠りしてしまった学生も多い印象でした。パネルディスカッションなど、双方向で行える活動があるとよかったのかな、と思います。
- 来年は6年生で私自身が行けるのか分かりませんが、夏季実習で行けていないので阿蘇地域に興味があります。
- 離島などにあまり馴染みがないので、一度行ってみたいと思っている。
- 天草地域の病院や施設を見学してみたいです。
- 県北地域への実習に参加してみたい。
- 荒尾、玉名方面に行ってみたいです。
- 離島の医療なども見てみたいです。
- 海関連で、天草にも行きたいです
- 魚が美味しい地域がいいです
- 天草、阿蘇、下天草、離島
- 特になし（5）

（２）フォトボイスに関するアンケート結果

【１】 フォトボイスの作成について



【２】 実際にフォトボイスを行ってみて、地域医療に関する教育的な効果はいかがでしたか？



○ それは、どのような点ですか？

【極めて効果あり】

- 写真を撮ることで、改めて地域に密着できた
- 実際に赴いて、現地の雰囲気や問題を知ること、自分に何ができるのかをそれぞれが考えることができたため。
- フォトボイスのために地域のいろいろな場面で写真におさめておこうとたくさん写真を撮ることができた。
- 自分のキャリアの中で実際に暮らすような場所で現地の方の声を聞いてとてもよかった。
- 写真を見ながらコメントをつけることは、言語化の力が必要なので、感情や情景について説明することで、その場面を振り返ることができる点。
- その地域での各班の印象に残ったことなので、地域の特色が現れるものが多かったと思う

- 実際にその地で働かれている方や地域医療の管理をする行政の方の話を聞くことができた点。
- 施設の連携を知ることができたため
- フォトボイスの「ネタ」を探そうとしたことが、いろいろなものを見て、聞いて、感じようという積極性につながって、実習をより充実したものにできたと思います。フォトボイスの制作は楽しいものだったのでデュティであるにもかかわらず「やらされている感」がなかったことも、教育効果としてとても良いものだと感じました。
- 勉強のモチベーションになった。
- ただの受動的な実習ではなく、能動的に地域を観察する態度に繋がったと思う
- 実際に地域医療に携わる方々の現状を目にすることで、将来の自分像をおおよそ予想することができるため。
- 個人の目から見た地域を共有できる方法であり、様々な視点をもつ契機となる点

【まあまあ効果あり】

- 写真から地域について考えることができた
- 診療所や施設の人から直接お話を聞くことで、ネットで調べるよりも、リアルな声を聞くことができた。
- 写真があることで思い出しやすくなるし、分かりやすくなるけど説明をつけるのが難しく、上手く説明したり作れなかったから。
- 初めて医学生の視点で水俣病について考えることが出来た点
- 地域で働く様々な人の姿をみることで、将来現場で働く姿を想像することができた。また、地域住民の方々とも触れ合うことができて、良かった
- 地方の病院について知れた点。
- どのような環境で働くのかイメージが付きやすい。実際にそこで働いている方のお話を聞くことができた。
- 実習中に見た景色から、そえられた言葉を元に、その写真が撮られた場面を思い出せる点。記憶に残りやすくなる点。
- 題材に関して、地域のことは関連しつつも、医療と紐付けるのは難しいと感じた。しかし、地域の医療に関連させようとする、作成についてはもちろんだが、写真の内容も暗いものやシリアスな雰囲気になる、という可能性はあると感じた。
- フィールドワークで学んだことを振り返る時間に出来た点。
- もう少し病院内を見て写真をとりたいかった
- その土地の雰囲気を知れるところ
- 実習を振り返ることができた点
- 医学的なことだけでなく、地域の人の生活にも触れられる点
- 医療現場での表面的な実務だけでなく、その地域における住民の生活を考えるきっかけになると思う。

【どちらとも】

- 医療機関では個人情報保護の観点からあまり写真が撮れず、食事内容や風景、家畜などの写真が主であった。地域を知る、という意味では非常に有用であったが、地域「医療」を知る、という意味では使いにくいかもしれない。

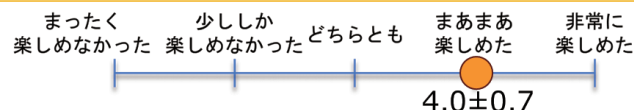
【効果少ない】

- 目的が手段になっている。

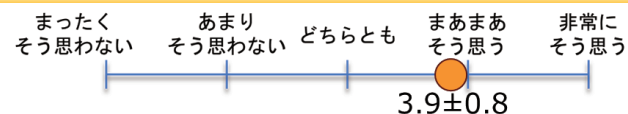
【3】フォトボイスを実際に行ってみた難易はいかがでしたか？



【4】フォトボイスを楽しめましたか？



【5】フォトボイスを作成することで、新たな気づきや発見につながると感じますか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- 写真から伝えたいことを自分で述べる点。
- 写真を見返して得る新たな気づきがある点
- 作成する際に自分が何に最も心を動かされたかを知ることが出来たと思う
- 普段は見ない場所やなんとも思わない場所を景色を切り取り、限定する写真を使って見ることで違う視点を持ったり、より考えることができるから。
- 他の班員らに伝えたいという観点で地域を見ると普段気づかないようなところにも目が行き届くと感じた
- 写真と手引書を振り返り、視察したことへの復習になるから
- 作品として提出するため、ただ写真を撮るだけではなくその背景まで考えて撮影するようになると思うため
- 個人の目から見た地域を共有できる方法であり、様々な視点をもつ契機となる点

【まあまあそう思う】

- フォトボイスのネタを探すために、普段目をむけないようなところにまで目を向けることができた。
- 文字に起こすことで新たな気づきが見つかる点
- 後で写真を見ることで、写真をとった時とは違った気づきや考えが出てくると思うから。
- 踏査する上で、些細な風景や日常も繊細に感じ取れると思うため。
- 何気なく撮影した写真であっても、見返すことで新たな発見につながる可能性がある点。
- フォトボイスを作成しようとする中で、実習中の姿勢がより積極的になる点。
- その土地の特徴を探そうとする点

- 説明を加えることを前提として写真を撮ることで、より深い内容が凝集された写真を撮影することができるため。
- ちょっとしたことで写真に収めようとするため、地域の細かい部分にも目を向けることができる点

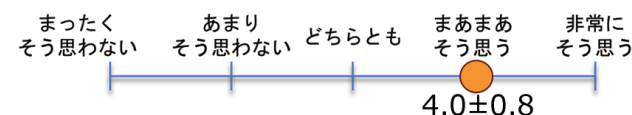
【どちらとも】

- 写真の背景
- フォトボイスを作ろうとする過程で発見につながっていると考える。
- 気付く時もあれば、気付かない時もあるから

【あまりそう思わない】

- 発見というよりは振り返りだと感じました
- 初参加ということもあり、フォトボイスを考えることが難しく、研修中に終始写真スポットを考えるために、講演に集中できなかった、さらに撮影した写真について新たな発見をする余裕がなかった

【6】フォトボイスを作成した場面の深い洞察につながりましたか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- 写真を撮ってそれに関することを調べた点。
- 写真につけるボイスを考える時に、地域のことも考えるから。
- 写真を見返すことで新たな発見につながる可能性がある点。
- 限定された景色から伝えたい事についてより深く考えた点。
- 他の班員らに伝えたいという観点で地域を見ると普段気づかないようなところにも目が行き届くと感じた
- 撮った写真にコメントをつけるために、ネットなどで知識を拾うようになるため深い洞察に繋がると考える
- 個人の目から見た地域を共有できる方法であり、様々な視点をもつ契機となる点

【まあまあそう思う】

- 一つの写真がただの風景ではなく、その背景を考えることで地域の理解が深まると感じた。
- よりしっかり写真を見ることになる点
- 写真に残っていることで、何度も振り返ることができるから。
- その施設がどのようなことを目的に活動されているのかをしっかりと考えるきっかけになったため。
- 文章を添えるのでその写真から何を伝えたいかを文字にして認識することが出来た
- 写真を見ながら、後から考えることができる点。

- 説明のキャプションを考えることは、写真を撮った意図などを整理することにつながって、より深く考えることができたと思います。
- 言葉にすることで理解が深まるから
- 写真は一目見ただけで終わることが多いですが、一つ一つの情報を取り込んで理解しようとすることで、より深い考察が可能となるため。
- 情景を思い浮かべる点
- 他の場面で聞いたことも合わせて振り返ることが出来た点
- 水俣が、環境保全にどのように取り組んでいるのかがわかった。

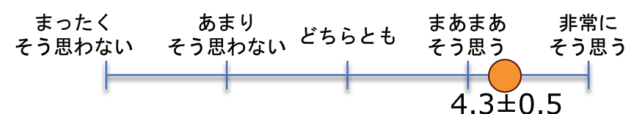
【どちらとも】

- 地域についてより深く考えることができた
- そんなに深くはないと思った。

【あまりそう思わない】

- 自分の感性のままに撮影したものに説明を加えるのが非常に難しく、深い洞察を入れる余裕がなかった

【7】写真(フォト)と説明(ボイス)を組み合わせることは、相手に伝える上で効果的だと思いましたか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- 写真だけや説明だけだと分かりにくい内容もどちらもあることで分かりやすくなると思うから。実際に自分でとった写真を考察することで、臨場感のようなものも生まれると思うので、伝わりやすくなると思う。
- 実際の写真を提示することで、その場でどのような学びを得たのかが分かりやすく受け取れるため。
- 行ったことがない人にも写真があった方が説明が伝わりやすい点。
- フォトだけでは伝わらない部分をボイスでつたえることができるから。
- 視覚が話に加わると良いから。
- 文字のない写真という情報をもとに、自分の言葉でその内容を伝えることは、自身の感性や感情をのせることができ、個々人の意見を表出・共有できる点。
- 印象的な写真で見ると興味を持ってもらうことで文章の方も見る人の記憶に残りやすいと思う
- 写真を言語化するとともに思考も言語化しており、文脈の中での視点を発表できる点
- 写真だけ、文章だけではわかりにくいものでも、これらを合わせることでより理解が深まることのできるため。

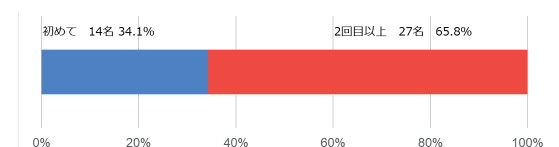
- 話だけでは無く、写真を添えることでよりその場の雰囲気などを想像することができるから。
- 写真だけ、言葉だけでは伝わらない部分を補い合っているため、非常に有効な成果共有の手法だと思う
- フォトボイスを作るのも、他の人が作品を見るのも、普段親しんでいるインスタグラムやツイッターといったSNSのような感覚で楽しめるなという印象を受けました。その点で、特に大学生のような若い世代にとっては、伝えやすい・受け取りやすい効果的な手法だと思いました。

【まあまあそう思う】

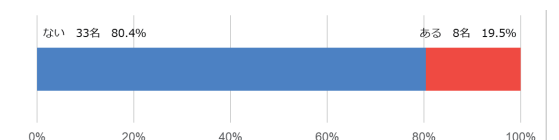
- 写真が印象に残りやすく見た人の記憶に残りやすい
- ボイスを付け加えることで、撮影者以外にもどういう意図でこの写真を撮ったかが伝わるから。
- 視覚的情報が加わる点
- 自分はそのままでできなかったと思うが、写真と説明を組み合わせることは、人に説明する能力として必要なのは共感する
- 発表の際に見やすい。
- 他の班のフォトボイスを見たとき、写真とその説明から、活動の様子がよく伝わってきた。
- 撮った側が着目して欲しい所以外に相手は目がいつている可能性があるから
- 写真によって相手が想像しやすい点
- 実際の様子も、どのような意図があるかも知れるから
- 片方だけよりも表現が広がった点

(3) 肥後狂句に関するアンケート結果

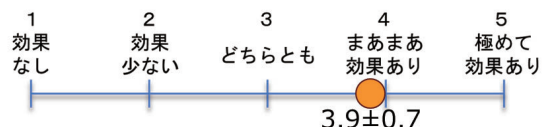
【1】学校教育以外で、肥後狂句の作成について



【2】短い定型詩(短歌、俳句、川柳)を特別に習ったことがありますか？



【3】実際に行ってみて、地域医療に関する教育的な効果はいかがでしたか？



○ それは、どのような点ですか？

【極めて効果あり】

- 私は、例で挙げられた笠をもとに連想される実習の場面を考えるので、様々な実習の場面を思い出す良いきっかけになる点。
- 短い言葉で自分の伝えたいことを伝えるために様々な視点で考えることが出来た
- その地域の特徴的なものを知ることができるから
- 知らない方言を知れた。
- その地域に関して考えるきっかけとなるから。
- 地域の医療に関して事前にある程度分かった上で実際にその地を訪れ、住民の方や医療関係者の声を聴くことができた点。
- 地域の言葉を知るとは文化人類学のフィールドワークとの類似点であり、将来地域に住む際にその土地を知ることにつながる考えたから。

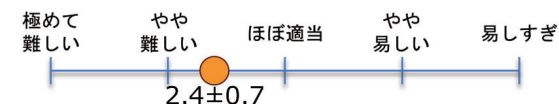
【まあまあ効果あり】

- 自分が感じたことや学んだことを面白く周りの学生や関係者の方に伝えることができるため。
- 地域について考えるきっかけにはなるとは思う
- 熊本弁と組み合わせることで文化的にも良いから。
- 地域のことばを使って、学んだことを限られた文字数で表すのは結構難しく、頭を使うので、学んだ内容がより記憶に残りやすくなる点。
- 肥後狂句という文化を知れた事自体が楽しく、ローカルな文化への関心を持つという地域医療の原点の一つに迫れた気がします。
- 地域に対する興味が深まる気はするが、医療との関係性は薄いように思われる
- 方言を使うことで地元の人と近い視点で状況を表現できるから
- その土地について知れる点
- 他の場面で聞いたことも合わせて振り返ることが出来た点
- 地域の方言を学ぶことができた点

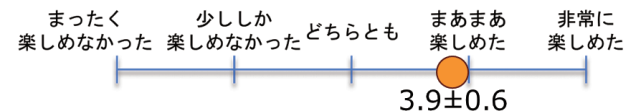
【どちらとも】

- 要点を短くまとめることができる
- 方言を少しだけ勉強できた。
- 短い肥後狂句の中に地域医療のことを入れるのが難しかった。
- 肥後弁を学ぶことで、昔あるいは、今も使われている地域言語文化を知ることにつながり、地域特に僻地では、肥後弁が盛んなところもあると思うので、地域住民との話の中でも使えたと感じたから。
- 笠が地域医療に限定されている言葉であれば、より地域医療に関する教育が可能となるかもしれません。

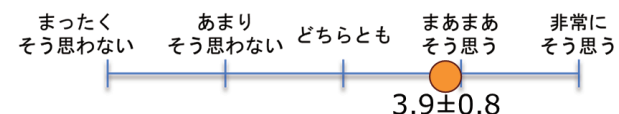
【4】肥後狂句を作成してみて難易度はいかがですか？



【5】肥後狂句を楽しめましたか？



【6】肥後狂句を作成することで、新たな気づきや発見がありましたか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- 新しく知った方言の使い方を知れた。
- 題材について最も伝えたいことは何かを考えることが出来た
- 方言の使い方など
- 知らない言葉を新しく学べた
- 熊本市に住んでいると馴染みのない方言を使うことで、方言に含まれる地域特有のニュアンス、空気感に触れることができた

【まあまあそう思う】

- 俳句とかは日頃あまり読まないで、慣れない分色々なことに目を向けて、たくさんのことに気がつけた。
- ほかの班の肥後狂句を見て、面白かったし自分には無い視点のものもあったから。
- 肥後狂句を作った際に、それぞれが施設をまわって感じたことを共有できたため。自分と違った視点を新しく知ることが出来た。
- その地域について調べて学ぶから。
- 他の人のも見て学びになった。
- 詠んだ場面を改めて思い出すことで、実習中で得た他の学びも交えて、新たな見方や気づきがあったと実感できる点。
- ことばの意味などを知ることが出来た。
- その場面における自身の感情や、地域の人々の思い。
- 地域についてより深く知ることができた。

- ・ 笠には地域の方が使われており、これと地域の特徴や文化をリンクさせることで深い考察が可能となるため。
- ・ 方言の表面的な意味の裏にある本当の意味などを知ることができた点
- ・ 水俣芦北地域を見て、有明海や山林を見た時の思いを方言にして表現するのが難しいと感じたから

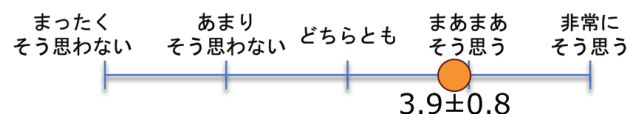
【どちらとも】

- ・ 方言を知ることができた

【あまりそう思わない】

- ・ 肥後狂句自体が難しく、楽しんだり、新たな発見をする余裕はなかった
- ・ 気付く時もあれば気付かない時もあるから
- ・ 発見というよりは振り返りだと感じた
- ・ 地域についてより深く知ることができた。
- ・ 笠には地域の方が使われており、これと地域の特徴や文化をリンクさせることで深い考察が可能となるため。
- ・ 方言の表面的な意味の裏にある本当の意味などを知ることができた点
- ・ 水俣芦北地域を見て、有明海や山林を見た時の思いを方言にして表現するのが難しいと感じたから

【7】 肥後狂句の題材として取り上げた場面や事例の深い洞察につながりましたか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- ・ 取り上げた場面を振り返ることができた。
- ・ 実習中で得た他の学びも交えて、新たな見方や気づきがあったと実感できる点。
- ・ その題材で最も大切なことはなにか考えることが出来た
- ・ 自信を含めたその関係者の方々の思いを考えることができた点。
- ・ 食べたものや景色など思い出すことができる
- ・ 水俣芦北地域を見て、有明海や山林を見た時の思いを方言にして表現するのが難しいと感じたから

【まあまあそう思う】

- ・ ただの景色も、その裏にさまざまな背景があることを知れた。
- ・ 肥後狂句の中にどう地域医療について入れるか考える時に、地域医療のことについて深く考えたり思い出ししたりしたから。
- ・ 同じ施設を回っても、異なる意見や新たな視点での感想を共有できたため。

- ・ その地域について深く知るきっかけになる点。
- ・ ことばを選ぶ中で、様々な方向から考察を深めることが出来た。
- ・ 趣を感じる景色や文化に目が行き、それをまた趣があると言語化しようとするいい機会になったと思った
- ・ 合計17文字の中に伝えたいことを詰め込むので、より内容の濃い情報が込められるため。
- ・ 限られた字数内で表現するのには、その状況を洞察しなければいけないから。
- ・ 他の場面で聞いたことも合わせて振り返ることが出来た点

【どちらとも】

- ・ 地域について深く考えることができた

- ・ 今回は特になし

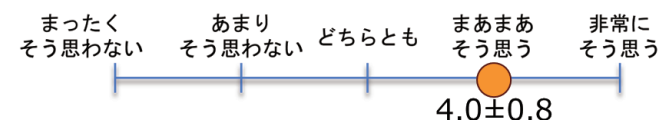
【あまりそう思わない】

- ・ 肥後狂句を成立させることに一生懸命なあまり、深い洞察をする余裕はなかった

【まったくそう思わない】

- ・ 実習中の一コマを定型句に落とし込むために、ある出来事について深く洞察する必要があるため

【8】 肥後狂句で方言の仕様や地域に特化した題材を設定することは、地域医療を考えるうえで効果的だと思いますか？



○ それは、どのような点ですか？

【非常にそう思う】

- ・ 地域とその地域の方言や特徴的な題材は、切っても切り離せない関係なので、考察することは大切だと思うから。
- ・ その地域を知ることがその地域の医療を知ることにつながると思うから。
- ・ 日頃は使わないような熊本弁を使うことで、古き良き熊本文化に触れるきっかけにもなる点。地域医療では、熊本弁を使う頻度が比較的多いように感じるため、この点においても有用だと感じる。
- ・ その地域への親近感が湧き、その土地に生きる人がいることを実感できたと思う
- ・ 題材で選ばれるものはその地域住民にとっての日常だと思うから
- ・ 趣を感じる景色や文化に目が行き、それをまた趣があると言語化しようとするいい機会になったと思った
- ・ 地域を見た時の思いを方言にして表現する事は、地域を知ること、知ろうとする姿勢となるため地域医療についてより当事者意識を持つことができると考えたから
- ・ 地域の生活に密着した医療を行っていくためにも、狂句などはその地域のことを知ることができてよいと思う。

- 医学知識などに直接関係があるわけではありませんが、地域の文化を知るといふ、地域医療における重要なマインドの涵養に大きな効果があるように感じています。特に、鹿児島出身で「ノンネイティブ」の私は、言葉の意味を「ネイティブ」の班員に訊いたり、検索したり、数年前に面白いと思って買ったものの特に読む機会のなかった『こらおもしろか 肥後弁辞典（中川義一編著、熊本出版文化会館）』を引っ張り出したりと、いろいろ苦労しましたが、楽しんで取り組むことができました。

【まあまあそう思う】

- 熊本弁のようにすることで、より地域の雰囲気を出すことができる点。
- 方言や地域について考えるきっかけになると思う。ここで考えたことが、将来勤務するときに多少は役立つと思う
- 方言を知っておくと便利なこともある点。
- 地域によって文化も違うから。
- 地域のことを知るために、ことばを知ることが役に立つと思う。
- 地域に特化することでその地域に関する知識が俳句を作る際に求められるから。
- 地域について知ろうとするきっかけとなる点

【どちらとも】

- 将来地域医療を行う時に方言を使う住民を診察する可能性があるから
- 方言を無理に使うとかなり難しくなるので、頭の5文字もフリーにすると読みやすいなと感じた。
- 地域の空気感を肌で感じることでできる手段であると思うが、医療と結びつけるのは少し難しいと感じた
- 笠を地域医療と結びつけることが自分にとっては難しかったため。

（４）夏季実習に参加した自身の成果

■ 交流や地域とのコミュニケーション

• 気晴らしやレクリエーション、レジャーとなった	3.4±0.6
• 同学年、他学年、他大学の医学生との交流の場になった	3.7±0.4
• 訪問先の関係者、地域住民と交流ができた	3.4±0.5
• 訪問先から歓迎されたと感じた	3.6±0.4

■ 芦北・水俣地域を知ることについて

• 地域の魅力が伝わった	3.7±0.4
• 地理、地勢、風土が分かった	3.5±0.5

• 歴史・文化が分かった	3.4±0.5
• 暮らしや住まいの実情が分かった	3.4±0.6
• 地域の医療・福祉・介護・保健や社会の現状と将来像が分かった	3.5±0.5
• 実際に住んでみたいと思った	2.9±0.5
• また、観光などで訪れたいと思った	3.4±0.5

■ 医学生として、将来の医師として、医師像、働き方など

• 将来の医師としてのキャリアを考える参考になった	3.5±0.5
• 将来の勤務するかもしれない地域の医療に携わる動機付けとなった	3.6±0.4
• へき地、離島、医師不足地域で働く医師や医療人のロールモデルや好事例を見つけた	3.3±0.5
• へき地、離島、医師不足地域で医師として働くのは大変さや苦労が分かった	3.5±0.5
• へき地、離島、医師不足地域で医師として働くのはやりがいがあると思った	3.5±0.5
• 大学での授業や実習の学修内容のガイドや補強となった	3.5±0.5
• 地域医療学、社会医学、公衆衛生学などの医学的な知識の向上となった	3.4±0.6
• 地域医療学、社会医学、公衆衛生学などの分野に学術的な興味湧いた	3.4±0.4
• 医学生でも訪問先の関係者や住民から期待されていることが分かった	3.7±0.4
• 医療人として係わることは、地域のエンパワメント（元気づけ）につながる ことが分かった	3.5±0.5
• 訪問地域で、医師として仕事と生活を融合・両立できそうだった	3.3±0.5
• 将来、自分の専門分野にかかわらず地域医療に携わりたいと思った	3.4±0.5

6. 夏季実習参加学生の感想

鹿児島大学 6年

今回の実習では、地域の歴史・文化・医療などの実情を学ぶことができましたが、それらを班員全体で発表スライドにまとめる活動により、より深い考察・理解ができたと思います。1泊2日という短い期間ながら、充実していました。地域の方々、特にフィールドワークで訪れた久木野地区の多くの方々に暖かく迎えていただいたことも印象的で、将来的な地域医療の担い手としての期待を感じました。皆様のご厚意に深く感謝いたします。

熊本大学 5年

芦北地方での夏季特別地域医療実習を通して、高齢化や水俣病といった地域特有の健康課題について考えるきっかけを得た。限られた医療資源の中で多職種が連携し、住民の生活に寄り添いながら医療を提供する姿に、地域医療の本質を見た気がした。一方で、私はお酒が飲めず、「飲みニケーション」に依拠した関係づくりに難しさを感じた。お酒に頼らずに他者との信頼関係を築く方法や、自分らしいコミュニケーションの在り方を模索していくことが自分自身の課題であると思う。地域で求められる医療人として、誠実に人と向き合う姿勢を大切にしたい。

自治医科大学 5年

リーダーとしてグループをまとめる体験ができ過去の夏季研修の中で最も積極的に取り組むことができたと思う。将来地域医療を行っていく上で地域の状況や風土などをすることはとても有用なものであり、今回水俣・芦北についてそれらを学ぶことができたのは大変良い経験であったと感じる。地域で求められる医療人として、患者の生活背景や文化、解釈モデルなどを理解し、全身をみられるような医師となるべきだと考えた

自治医科大学 5年

- ①夏季地域医療特別実習の達成度：
 - ・地域を知り今後の地域医療についてより興味を持つことが出来た。地域特性や環境などについてもフォトボイス作成や肥後狂言を通じて理解することが出来た。
- ②この実習で学んだこと：
 - ・水俣芦北地域の医療について、水俣病をはじめとして周囲の医療機関との関係も含めて学ぶことが出来た。現地の文化についても知ることが出来た。
- ③これらをもとに、地域において求められる医療人としての理想像について考えたこと：
 - ・理想像として医師としての知識や人柄に加え、地域の住人の一人としての自覚を持つことが重要だと考えた。

熊本大学 5年

今回、水俣・芦北地域を訪問し、地域医療の実情を強く体感することができました。水俣・芦北といった県南地域は私にとってあまり馴染みのない地域でしたが、今回の実習を経て、より親しみを感じるようになりました。学生代表として挨拶などをする中で、院長先生や施設の方々から詳しいお話を伺ったり、現地の問題を生の声で聞いたことは、自分の将来を考える上で大変参考になりました。

特に印象に残っているのは、1日目の保健所の方からの講話と、水俣市立総合医療センター院長の阿部先生のお話です。県南地域の医療問題や医師不足の現状は、事前学習で調べていた内容よりも一層深刻であり、強い衝撃を受けました。将来地域で働く際には、その地域のかかりつけ医としてだけでなく、学校医や産業医、介護認定などの多様な業務を担い、地域社会と幅広くつながりを持つ医師になりたいと感じました。

熊本大学 5年

今回の実習を通して、訪問地域の実情を学ぶことができた。特に自分が訪れた久木野地区は棚田が多く、高齢化の問題や棚田の保全、へき地診療所の維持の難しさを、さまざまな方のお話の中で実感した。へき地の診療所で医師として働くためにはその地域に住む人たちの背景を知り、生活環境を知ることが重要だと知った。今回はリーダーとして積極的に実習に関わることができたため達成度は高いと考える。

自治医科大学 5年

今回の夏季地域医療特別実習では、地域住民や医療機関、行政と直接関わることで、地域医療の現状と課題を多角的に理解でき、目標を十分に達成できたと感じた。特に水俣病史料館の視察を通して、公害の歴史と住民の苦難を知り、医療人として社会的背景に目を向ける姿勢の重要性を学んだ。今後は単に医療を提供するだけでなく、地域の歴史や文化を尊重し、住民と協働して課題解決に取り組む医師像を理想としたい。

熊本大学 3年

今回、夏季地域医療特別実習に参加させていただき、地域の医療の現状や歴史、文化を理解することができました。水俣といえば水俣病が想起されるかもしれませんが、実習先でいただいた海鮮類はどれも大変美味で、水俣の方々の努力を垣間見ることができました。また、夏季は熊本大学だけでなく、自治医科大学や鹿児島大学の医学生の方々も参加されており、彼らと交流を深めることで、新鮮な体験を得ることができました。将来、地域医療に携わる医師となった時に、実習で得た経験が必ず力になると感じました。今回の夏季地域医療特別実習に携わっていただいた地域医療支援センターの方々、総合診療科の先生方、また、訪問先で貴重なお話をさせていただいた多くの方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

熊本大学 5年

小学生以来に訪れた芦北・水俣地域について、今回は、地域医療や地域活性化という視点を加えて、深く知り学ぶことができ、目標を達成できた。

地域住民、特に高齢者に寄り添った具体的な自治体のサービスや、施設と医療機関の連携の難しさ、アートの方面から地域を活性化する方法としての美術館の存在が特に印象深い。高度な医療を提供するというよりは、「近く寄り添う」かたちでの医療が求められているのだと改めて感じ、そのような医療を提供する医師像を理想像として掲げる。

班内の最上級生としてまとめられるか不安であったが、班員全員で分担・共有しながら作成物や発表を作り上げられたことは、非常に良かったと実感している。このつながりを今後もずっと大切にしていきたいと強く感じた実習だった。

自治医科大学 4年

夏季地域医療特別実習では、主に久木野地区を訪れました。愛林館や診療所に足を運び、地域の暮らしを直に感じる中で、高齢化や医師不足といった課題を実感しました。特に「診療所は地域住民に安心感を与える存在である」という言葉が印象に残りました。医療は治療にとどまらず、生活全体を支える営みであることを学び、今後は地域に根差し、信頼される医療人を目指したいと強く感じました。

熊本大学 3年

夏季地域医療特別実習の達成度は高かったと思う。今回の実習で訪れた場所は今までの実習で訪れた所と少し毛色が違った。今までは老人ホームや診療所、病院といった医療機関を中心に訪問させていただいたが、今回は町役場や美術館に訪れた。そのおかげで行政の取り組みの重要性や精神面で健康を支えることの大切さを学ぶことが出来た。これらの経験から地域に求められる医療人としての理想像は身体的な健康を促進することはもちろん精神的な支えになることの出来る医療人であると考えます。

熊本大学3年

今年もお世話になりました。3度目の実習ということで段々と流れや雰囲気があるように、一方で1番実りのある実習になったように思います。特別実習の達成度については、前述したようにこれまでに最も学びを得られ、達成感がありました。事前課題での予習を行ったことで地域についての情報や課題を意識した上で実習に取り組めました。予習を行ったからこそ、現地での実習でないと得られない学びが浮き彫りになり、実習の意義を感じました。実習で学んだこととしては、白梅病院の院長が仰った「地域医療における医師像」が最も印象に残りました。地域の医師とは田舎の医師ということではなく、学校医や産業医なども兼ねて地域全体を診る医師のことだと仰っており、数年後・数十年後の人口や医師偏在を踏まえ地域の医師としての在るべき姿が見つかったように思いました。

熊本大学3年

全ての行程において積極的に参加することができて、また話し合いでも深く地域の特徴などを話し合うことができました。この実習では水俣の地域の特徴や津奈木町での人々の生活の場を確認することができたのですごく勉強になりました。これらよりこの地域で求められている医療人としての理想像は、その地域に根ざした、温かい医療が提供できる医療人だと考えます。なので、患者さんなどとたくさんコミュニケーションをとってより良い医師が理想像だと考えました。

自治医科大学3年

今回の実習で水俣芦北地域についてより深く知ることができた。水俣芦北地域は高齢化が進んでいて診療所はあるが週に2日のみの営業であり都市部と比べ地域について平等に医療を提供することができないことが課題だと感じた。また、地域について派遣される医師自体の数も少ないので自分の専門域だけでなく総合診療医のように患者さんの全身の症状を見ることができる医師が地域医療において必要であると感じた。

自治医科大学3年

今回の地域医療実習で、私は、水俣地域の医療、介護、暮らし、産業について深く学ぶことができました。水俣地域医療センターでは過疎化が進む水俣地域においての今までとこれからの医療のあり方を、久木野地域の診療所では人口減少地域の診療所存続のお話、小規模多機能施設では高齢者のオーダーメイドのような介護のあり方を、愛林館では、久木野では産業的に厳しく、でもおいしいお米を作っている方の気持ちも汲み取ることができました。自分の将来と照らし合わせ、とても充実した研修となりました。関わってくださった方々ありがとうございました。

熊本大学3年

今回の実習では、地域の医療に関するだけでなく、水俣の文化や自然に触れることができ、水俣病についてなど地域特有の医療についても深く学ぶことができました。いい学びの機会になったと感じています。地域であるため、高齢化や人口減少などの問題に悩まれていましたが、実習で関わった多くの方が今後の水俣を良くするためにどうすればいいのかに情熱を持って取り組んでいらしゃったのが印象的でした。将来地域医療に関わる時は、医療に関してだけでなく地域の未来のことにも気にかけて、地域の人や物、自然など全てを尊重できる医療人になりたいと考えました。

熊本大学3年

今回の夏季地域医療実習である芦北・水俣地域は私の地元から近く、小さい頃から釣りや海水浴、スポーツの大会などで訪れるような親しみのある地域であった。主にレジャー目的でしか訪れてこなかった地域であるが、今回は医療や福祉などの観点から地域について学ぶことができる機会となった。地域の医療機関では、医師が患者の病気だけでなくその背景まで含めて診る必要性について学んだ。地域の方々、空気感に馴染みながら、患者に全人的医療を提供できる医師になりたいと感じた。

熊本大学3年

フィールドワークの発表会があったことで、学んだことをすぐに自ら咀嚼しまとめて上げることができた。水俣に芦北地区では高齢化率が非常に高く、人口も減ってきているため、公共交通機関や道路の整備、子育てをサポートする制度がもっとあれば良くなるなど感じた。将来地域医療の医師として働くためには、専門的な分野だけでなく総合的な診療やその患者に合った医療が求められているなど感じた。

熊本大学3年

今回の地域医療特別実習で私が訪問した特別養護老人ホームあけぼの苑は、従来型の特別養護老人ホームに加えユニット型も運営しており、ユニット型は在宅しているような生活スタイルを保てるのが魅力であることがわかった。また、1人の嘱託医が臨機応変に利用者さんの診察をしており、介護職員が有難いと仰っていたのが印象的だった。私はその嘱託医のように、地域の方々が人生を全うするためのお手伝いを惜しまない医療人が、地域に求め達成度はられていると感じた。新たな知見を多く得られたため、今回の実習の達成度は高いと感じられる。

熊本大学2年

水俣での夏季特別地域医療実習を通じて、地域医療の現場を実際に体験でき、当初の目標を概ね達成できたと感じた。患者さんの生活や地域の歴史・環境と深く結びついた医療が行われていることを学び、病気を診るだけでなく生活全体を支える姿勢の重要性を実感した。これを通じて、地域に寄り添い住民と信頼関係を築き、健康と生活を総合的に支えられる医師こそが、地域において求められる理想像であると考えた。

熊本大学2年

地域のことを調べ、他大学との交流を深めることを達成できた。さまざまな知識をもつ医者が大事ということがわかった

自治医科大学3年

- ①夏季地域医療特別実習の達成度：
 - ・積極的な活動をする事ができた。初めて参加したが、班員と沢山コミュニケーションをとり協力しながら実習を進めることができた。
 - ②この実習で学んだこと：
 - ・1日目は、フィールドワークで芦北地方の町並みやそこで行われている地域医療や福祉施設について詳しく知ることができた。
 - ・2日目は、水俣病の語り部の方の講話を聞いて、水俣病についての実体験から、環境を守ることの大切さを学んだ。
 - ③これらをもとに、地域において求められる医療人としての理想像について考えたこと：
 - ・地域において求められる医師は、地域の患者に寄り添い、患者の背景までしっかり診て総合的な診療を行うことができる医師だと思った。

熊本大学3年

今回の実習を通じて水俣地域の実情や魅力を知ることが出来た。1度しか訪れたことの無い地域で水俣病について勉強した程度の知識しか無かったので水俣病について医療や福祉という面で考えることが出来たのは良かったと思う。また、地域のかかりつけ医となっている深水医院でお話を伺い自分の将来の医師像を具体的に持つことが出来た。そのために何をすべきかというお話もありとても学びになった。

熊本大学2年

夏季地域医療特別実習に参加して、今回の実習の目標とねらいを達成できたと思います。地域で活躍する医師をはじめ、福祉施設の人の話や、地域の活性化に尽力する人の話を聞くことで、地域の現状と課題をさまざまな視点から知ることができました。その地域を知ることはその地域の医療を知ることにつながると思います。肥後狂句や、フォトボイスは、地域を知るきっかけにもなりました。福祉施設と病院が密に連携する姿勢や、自分の専門に捉われず広い視野を持つことができる医師が地域で働く上で求められていると感じました。

熊本大学 2 年

昨年は冬季地域医療特別実習に参加させていただき、今夏が初の夏季地域特別医療実習となりましたが、たくさんのことを学ぶことができました。

今回特に学ぶことができたことは、地域では医療従事者が不足しているということと、地域ならではの課題の解決にも貢献していくことが大切ということです。

自分の専門以外でも診察しなければならぬ事があると聞き、幅広く学んでおくことが大切だと感じました。

また、その地域ごとに特有の医療課題があるため、地域についてよく知り、その解決に向けてできることをやるのが大事だと感じました。

これらのことから、自身の専門領域以外のことに對しても興味を持ち学んでいく姿勢や、他者と協力して限られた人数でもなるべく充実した医療を提供できるようにがんばることが大切だと考えました。

熊本大学 2 年

今回の実習は地元水俣・芦北で行われ、フィールドワークでは、自分の小さいときのかかりつけ医を医学生としての立場で見る貴重な経験となった。高齢化が進む地域で、医療と福祉がどのように連携しているかを学び、人の病だけでなく背景や人生に目を向ける重要性を実感した。地域医療人の理想像は、細分化された専門性に偏らず全体を診る視点を持ち、人と人のつながりを大切にしながら地域に寄り添える存在だと考える。

熊本大学 2 年

フィールドワークでは病院と施設の連携や、NPO法人の取り組みを見学して、住民と地域のコミュニティをつくっていることが分かりました。色々な分野の施設が見学できて良かったです。2日目の地域視察では、水俣の歴史と環境保護のための取り組みについて考える重要な機会になりました。病気だけでなく、その人がどのような生活をしているか含めて診る医療が大切だと思いました。

自治医科大学 2 年

夏季実習では芦北、水俣地域における医療、並びに行政の実態について学ぶことができた。少子化や高齢化が進んでいると言言で言っても、その原因は必ずしも同じ物で、単純なことではないと感じた。産科医が不足している話を聞き、確かに熊本市以外で子育てをしようとする夫婦、パートナーに於いて、産婦人科医がいないことはその地域での子育てを選択する上で大きなマイナスポイントにつながると思う。地域によってはそれ以前に医師自体が不足していることもあるため、将来自分が医師として僻地医療に関わる際には一つの診療科に固執せず、患者のことを考えた柔軟な思考ができるように努めたいと思う。

熊本大学 2 年

今回の夏季地域医療特別体験実習は一泊二日という短い期間でしたが、中身が濃くとても多くのことを学ぶことができました。1日目ではフィールドワークで、実際に水俣の町を歩いて病院や環境施設など様々な施設を見ることができました。その中で特に深水医院の院長が語っていた、頭からつま先まで全部見れるようであればかかりつけ医なんてできないという言葉が印象に残っています。地域で働く以上少ない人数で患者を見なければならぬので早く一人前になって体の全てを見ることのできる医者になりたいと思いました。2日目では水俣病について深く学ぶことができました。二日間本当にありがとうございました。

自治医科大学 2 年

- ①夏季地域医療特別実習の達成度：
・楽しく参加でき、それと同時にさまざまな学びを得ることができたと思う。
②この実習で学んだこと、③これらをもとに、地域において求められる医療人としての理想像について考えたこと：
・実際にそこで働いておられる先生方のお話を伺うことができ、大変学びになりました。これが大事、あれができるといいなどのアドバイスもいただき、これからの勉強へのモチベーションになるとともに、自分の将来について考える良い機会となりました。

熊本大学 1 年

入学して初めての実習であったが、非常に充実した貴重な経験をでき、中身の濃い2日間となった。私自身、今回の実習では事前学習をもとに、水俣の少子高齢化問題、水俣病に対しての課題に向けた対策の具体的な案について深く考えることが目標であり、班員とのフィールドワークやスライド作成の中でそれらを十分に達成することができた。またその中で熊大の先輩方や他大学の方との交流を深めることが出来たので、縦と横、両方の繋がりを強めることが出来た。今後、私は患者さんから信頼を得られるような医師になるために、普段から地域そのものに興味を持ち、その地域に根ざした問題を深く考えられるようになりたい。

自治医科大学 1 年

初めて夏季地域医療特別実習に参加したのですが水俣の医療や地域特性についてよく知ることができました。水俣の診療所を訪れた際には病院の先生から総合診療医についてのお話を詳しく聞くことができ色々なことを学びました。地域で必要とされる医師像が患者さんの些細な変化に気づける医師だと感じました。

熊本大学 1 年

今回は、初めての地域実習でしたが、積極的に参加できたと思います。事前の質問を考えたり、訪問先で質問したりと、同じ大学の先輩や、地域の人々とコミュニケーションを取ることができて良かったです。また、今回は自治医大の方と初めて交流しましたが、同じ班や同じ部屋の先輩方は優しく接してくださったので嬉しかったです。この実習では、人々との積極的なコミュニケーションや、将来まで持続可能なシステムの構築の大切さを学びました。班別研修で訪れた久木野診療所は、経営が難しい中でも地域枠の先生方が交代で診療されていて、地域の人の心の拠り所となっていることを知り、多様な疾患を診れる医師こそが地域に求められていると考えました。

熊本大学 1 年

今回の夏季地域医療特別実習では、自身の都合により、活動に関してはほぼ2日目からの参加であった。そのため実際に地域の医療機関などを訪れるフィールドには参加できなかった。このことから達成度はあまり高くはない。しかし、2日目の班の発表や地域の方々の食事、水俣資料館への訪問などに参加したことで、以前よりも深く、医療という面からこの地域を見る事ができたと思う。今回の医療実習を受けて、私が思う医療人の理想像は、自身が働く地域の実情をしっかりと把握し、医療がもつその地における役目を理解した上で医療を地域の方々に提供することができる事だと思う。

熊本大学 1 年

今回の実習先は水俣・芦北地域で、普段旅行などでもなかなか行かない地域であり、フィールドワークを行った地域を中心に、知らなかった文化や風土を学べ、また医療現場についての現状を知り、将来のキャリア形成のイメージに大きく繋がったという点で、実習を有意義なものにできたと感じる。へき地では特に、近くの診療所や医療機関が日々の生活の安心感を支えており、その安心感を与えられるのはそこに勤める医師に信頼を置いているからだろうと思う。地域医療に携わる医療人としての理想像として、最も大切なのは信頼してもらうことで、その為には知識や技術もそうだが、その地域の事をよく知り、地域の方の暮らしを理解することが重要だと感じた

自治医科大学 1 年

夏季地域特別実習では、事前学習を含め、実際に地域に赴くことで、深い学びがあったと感じた。私たちの班は、水俣を環境の側面から考える機会があり、どのように捉え、向き合えばいいのかを考えさせられた。また、病院実習を通じて、医師として患者と向き合う姿や万能に診る院長の高いスキルを見ることができ、将来、あるべき医師像を見学させてもらったと感じた。これらを通して、私の将来働く地域に少しでも貢献したいと感じた。

自治医科大学 1年

今回の夏季特別地域医療実習では、水俣病について医学生として改めて学び直すことができ、大変貴重な経験となりました。また、地域医療を担う医師が専門分野に限らず幅広い診療をすべてこなしているというお話を聞き、その責任の重さと地域医療における医師の役割を実感しました。地域に根差した医療には、その地域の生活環境と共に歴史的背景をも理解する姿勢が必要であると学びました。今後は知識と技術を研鑽し、住民に寄り添える医師を目指したいと考えました。

熊本大学 1年

夏季地域医療特別実習の達成度は、80%です。今回、地域医療特別実習に初めて参加し、水俣・芦北地域のことを学び、先輩や同級生、先生方との仲を深めることが出来ました。行く先々でいただいた料理もとても美味しく、のどかない景色も満喫でき、思い出に残る合宿になりました。一つ心残りなのが、質問や発表に取り組む意欲が足りなかったことです。この反省は次回に生かし、次の目標として取り組みたいと思います。

今回の実習で、地域のことや地域医療のことをたくさん学びましたが、その中で一番印象に残っているのは、水俣市立総合医療センターの方のお話のなかであった、「水俣は熊本の10年先をいっている」ということです。日本に住む私たちは、高齢化の問題からは逃げられないと思います。その高齢化問題と向き合う上で、地域医療の在り方次第で、日本全体の未来が大きく変わりあるのだとわかり、重要性を感じることができました。

これらのことより、地域に求められる医療人としての理想像として、「常に、現状を把握し、先を見て行動できる人」ではないかと思います。地域の人とコミュニケーションをとり、情報を取り入れ、ある程度予測もしながら、的確に対策を打っていくことが、地域医療を長く維持していくために必要だと思いました。ただ仕事をこなし、目の前の患者だけを見るのでは十分とはいえず、これからもっと幅広い分野のことを学んでいく必要があると感じました。

熊本大学 1年

水俣・芦北地域の夏季地域医療特別実習を通して、地域医療の現状と課題を深く学ぶことができました。この実習では、高齢化が進む地域特有の医療ニーズ、多職種、他施設連携の重要性、そして患者の生活背景に寄り添うことの価値を肌で感じることができました。これらの経験から、地域で求められる医療人とは、患者さんの病気だけでなく生活全体を診る視点を持ち、住民の心に寄り添いながら、多職種と連携して地域社会に貢献できる存在であると強く感じました。

熊本大学 1年

まだ一年生ということで、詳しい専門的なことはよく理解できない部分もあったが、自分が将来携わるであろう地域に低学年のうちから触れるという点では有意義なものになったと思う。

今回の実習では、芦北・水俣の自然や生活の一部に触れるとともに、どういった医療が求められているのかについて考えることができた。白梅病院の先生の話にもあったが、高齢者が多いこともあり、健康増進に積極的に取り組むことも重要だと思った。ほっとはうすでは、生活の支援が必要な方々が各々の仕事や活動に取り組まれている姿に触れ、こういった方々への医療も必要だと感じた。病気の治療だけでなく、その後のケアや予防もできる医師が理想だと考えた。

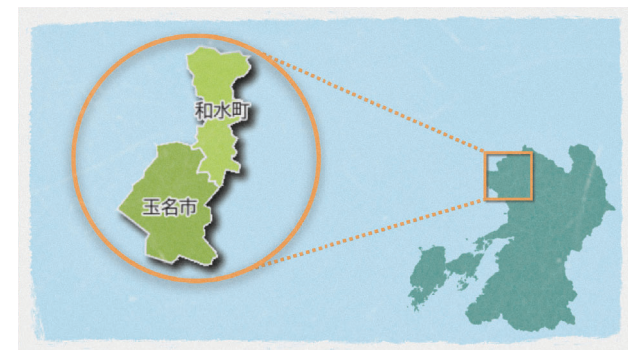
熊本大学 1年

事前学習やフィールドワークを通して芦北・水俣地域の医療の現状や課題を知ることができた。予防医学や水俣病に関する研究、地域医療における医師のさまざまな役割などについて学びを深めることができたと思う。今回の実習を通して、地域を知り、病気だけでなく、患者さんの生活にも目を向けることが大切だと感じた。

3 冬季地域医療特別実習

1. 概要

大学カリキュラム等の都合により夏季実習に参加できなかった学生を対象に、12月に1泊2日の日程で、玉名地域（玉名市・和水町）において冬季地域医療特別実習（以下「冬季実習」）を実施しました。くまもと県北病院をはじめ、関係機関の皆さまのご理解とご協力のもと、地域医療や福祉の現状、さらには町の歴史に触れることができる、大変充実した内容となりました。



- 実施日程
2025年12月23日（火）、12月24日（水）
- 実習地域
玉名地域（玉名市・和水町）
- 参加学生
熊本県医師修学資金貸与学生 3名

● スケジュール

1日目 12/23 (火)

時間	行程	詳細（場所等）
8:15	・ 集合	熊本大学病院
8:30	・ 移動	熊本市 → 玉名市
10:00	・ 講話	有明保健所 「日常の公衆衛生活動の延長線にある災害対応」 熊本県有明保健所 兼 山鹿保健所 所長 服部 希世子 先生
11:15	・ 講話	くまもと県北病院 「くまもと県北病院及び玉名地域に関する講話」 くまもと県北病院 総合診療科 医長 中村 孝典 先生
12:30	・ ランチミーティング	道の駅 きくすいロマン館
13:45	・ 地域視察	江田船山古墳公園・肥後民家村（和水町）
15:00	・ 見学	特別養護老人ホーム きくすい荘
16:30	・ 休憩・発表準備等	宿舎
18:30	・ 懇談会・意見交換会	中国料理 煌

2日目 12/24 (水)

時間	行程	詳細（場所等）
8:15	・ 移動	宿舎 → くまもと県北病院
8:30	・ 成果報告会準備	くまもと県北病院
9:00	・ 成果報告会・講評	くまもと県北病院
10:00	・ 移動	玉名市 → 熊本市
11:30	・ 帰着・解散	熊本大学病院

● 実習参加者および実習協力機関等

▼ 参加学生

＜熊本県医師修学資金貸与学生＞

- ・ 熊本大学医学部
4年...戸田 慎之介、松岡 りほ
2年...村田 英利佳

▼ 随員スタッフ等

＜熊本大学病院＞

- ・ 地域医療支援センター
センター長 松井 邦彦（総合診療科 教授）
特任講師 高柳 宏史
特任助教 堤 龍子
地域支援コーディネーター 無田 英昭、川添 光芳
事務補佐員 横手 友紀子
- ・ 地域医療・総合診療実践寄附講座
特任教授 荒木 智
特任助教 佐土原 道人、北村 泰斗
事務補佐員 山並 美緒

- ・ 総合診療科
医員 松田 圭史、下地 徹

＜熊本県健康福祉部 医療政策課＞

課長補佐 小山 耕太

▼ 実習協力機関・施設及び

ご協力いただいた皆さま（懇談会参加者を含む）

＜くまもと県北病院＞

院長 田宮 貞宏
総合診療科 中村 孝典、國行 浩平

＜有明保健所＞

所長 服部 希世子

＜高齢者福祉施設＞

特別養護老人ホーム きくすい荘

＜地域振興関連施設＞

和水町観光案内の会／江田船山古墳公園／肥後民家村

＜その他＞

ひきの荘／立願寺温泉ホテル湯里／道の駅菊水ロマン館 うさぎと亀／
中国料理 煌／玉名タクシー

2. 実習の様子

実習施設MAP



地理院地図(電子国土WEB)写真タイルを加工して作成

スケジュール

時間	行程
10:00~11:00	<講話> ・有明保健所
11:15~12:15	<講話等> ・くまもと県北病院
12:30~13:30	ランチミーティング(道の駅 きくすいロマン館)
13:45~14:45	<地域踏査> ・江田船山古墳講演・肥後民家村
15:00~16:00	<見学> ・特別養護老人ホーム きくすい荘

■ 1日目(12月23日)

有明保健所

有明保健所兼山鹿保健所 服部希世子 所長より、「日常の公衆衛生活動の延長線にある災害対応」をテーマにご講演いただきました。災害時における保健・医療・福祉の役割について解説いただくとともに、これまで先生ご自身が携わってこられた災害発生時の支援活動として、熊本地震における受援活動、能登半島地震でのDHEAT活動、令和7年豪雨時の支援活動など具体的な取り組みについてお話しいただきました。



くまもと県北病院

くまもと県北病院 田宮貞宏院長よりご挨拶を賜った後、同病院総合診療科の中村孝典先生よりご講話いただきました。玉名市の魅力について教えたいただいた後、同日、病院実習に訪れていた上級生も交えて、臨床推論の実践も行っていました。参加した学生は提示された症例について、上級生とともに原因や背景にある生活状況などを議論し、理解を深めました。



江田船山古墳公園・肥後民家村

江田船山古墳公園・肥後民家村にて、和水町観光協会の一森会長による、古墳や古民家についてのご説明を受けながら園内を散策しました。また古墳公園では、特別に、熊本地震および和水町地震で被災した江田船山古墳の復旧作業が行われている貴重な現場を見学させていただきました。



特別養護老人ホーム きくすい荘

特別養護老人ホームきくすい荘の前
淵施設長よりご挨拶を賜った後、介護
士の池田様のご案内のもと、施設内を
見学しました。また、きくすい荘は現
在、建替工事中で新たな施設の管理・
運営についてはこれまでの町直営から
社会福祉法人へ移行するという説明が
あり、その背景や移行によって期待さ
れる効果などについてお話をいただき
ました。



■ 2日目（12月24日）



成果発表会

くまもと県北病院に会場をお借りし
て、参加学生による今回の実習の成果
報告会を行いました。各自、スライド
資料を作成し、この実習を通して学ん
だことや地域で必要とされる医師像等
について考察し発表しました。



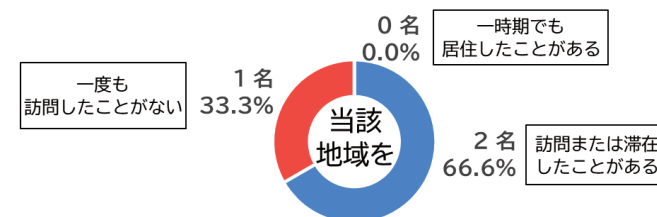
3. 冬季実習の評価と振り返り

【実施目的】

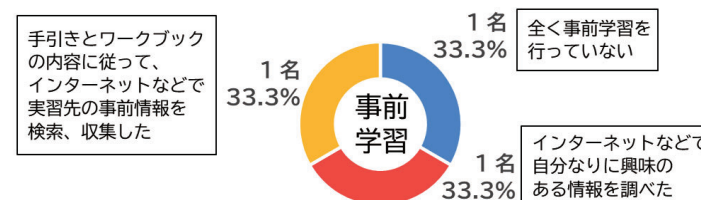
- ・ 冬季地域医療特別実習の教育的効果と「地域を知る」ことができたか検証
- ・ アンケートに回答することによる参加者の自己省察の促進
- ・ 今後の企画や運営の改善のための参考資料

（1）冬季実習に関するアンケート結果

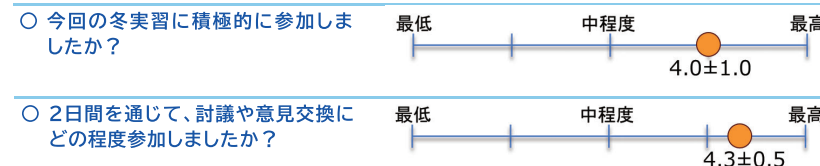
【1】 今回、冬季地域医療特別実習を行った「玉名地域（玉名市・和水町）」へのこれまでの訪問状況



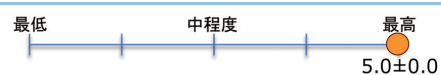
【2】 事前学習について、当日参加するまでの状態



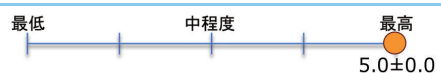
【3】 今回の冬季実習に参加したことへの自己評価



○ 2日間を通じて、冬季実習を楽しめましたか？

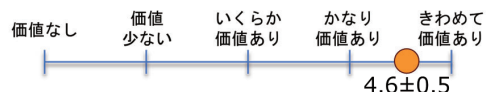


○ 今回の冬季実習で「地域を知る」ことができましたか？



【4】今回の夏季実習に対する全般的な評価

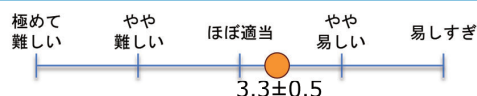
○ 実習内容の価値について



○ 実習内容に対する時間量について



○ 実習内容の難易度について



○ 今回の冬季実習全体にわたり「良かった」と思われる点

- 現場の先生のお話を聞いたり病院の内部を見ることができて勉強になりました。また、施設だけでなく環境や歴史についても触れることができて興味深かったです。
- 玉名市についての魅力を知ることが出来た。また、県北病院を見学することが出来たのはとても良かった

○ 今回の冬季実習全体にわたり「芳しくなかった」と思われる点

- 事前学習ができていなかった

【5】今回の冬季実習の構成、企画、運営等の各セッションについて

○ 開催時期・日程・日数について

- 日程などちょうどよかったと思います

○ 「冬季地域医療特別実習の手引きとワークブック」について

- ちょうどよかったです
- 当日受け取るよりも、事前にいただけたらと嬉しいです

○ 「事前学習や課題」について(※自身の取り組み状況にかかわらず)

- 人口や出生率はすぐに出てくるのですが、主な死因や喫煙率などを調べるのに苦戦しました。

○ 「フィールドワーク」という方法(地区視診、地域踏査、各所訪問)について

- 自分の目で見て感じるができる良い機会だと思います。その地域の気候との兼ね合いもあるのかなと思います。

○ 今後取り上げてもらいたい企画、内容、開催地域の希望などについて

- 天草の医療を見に行ってみたいです

(2) 冬季実習に参加した自身の成果

■ 交流や地域とのコミュニケーション

• 気晴らしやレクリエーション、レジャーとなった	4.0±0.0
• 同学年、他学年、他大学の医学生との交流の場になった	3.6±0.5
• 訪問先の関係者、地域住民と交流ができた	3.3±0.5
• 訪問先から歓迎されたと感じた	4.0±0.0

■ 玉名市・和水町地域を知ることについて

• 地域の魅力が伝わった	4.0±0.0
• 地理、地勢、風土が分かった	3.6±0.5
• 歴史・文化が分かった	4.0±0.0
• 暮らしや住まいの実情が分かった	3.6±0.5

・ 地域の医療・福祉・介護・保健や社会の現状と将来像が分かった	4.0±0.0
・ 実際に住んでみたいと思った	3.0±0.0
・ また、観光などで訪れたいと思った	3.3±0.5

■ 医学生として、将来の医師として、医師像、働き方など

・ 将来の医師としてのキャリアを考える参考になった	4.0±0.0
・ 将来の勤務するかもしれない地域の医療に携わる動機付けとなった	3.6±0.5
・ へき地、離島、医師不足地域で働く医師や医療人のロールモデルや好事例を見つけた	3.6±0.5
・ へき地、離島、医師不足地域で医師として働くのは大変さや苦労が分かった	3.6±0.5
・ へき地、離島、医師不足地域で医師として働くのはやりがいがあると思った	3.3±0.5
・ 大学での授業や実習の学修内容のガイドや補強となった	3.3±0.5
・ 地域医療学、社会医学、公衆衛生学などの医学的な知識の向上となった	3.6±0.5
・ 地域医療学、社会医学、公衆衛生学などの分野に学術的な興味が湧いた	3.3±0.5
・ 医学生でも訪問先の関係者や住民から期待されていることが分かった	4.0±0.0
・ 医療人として係わることは、地域のエンパワメント（元気付け）につながる ことが分かった	4.0±0.0
・ 訪問地域で、医師として仕事と生活を融合・両立できそうだった	3.3±0.5
・ 将来、自分の専門分野にかかわらず地域医療に携わりたいと思った	3.6±0.5

4. 冬季実習参加学生の感想

熊本大学4年

今回の冬季実習の参加者は少なかったが、その分コミュニケーションを多くとる機会が多かったことはとても良かったことだと思う。これまであまり玉名市を訪れたことはなく、どのような町かもあまり知らなかったが、その土地の特徴や医療の実情を知ることができたのはとてもためになった。また今後実習や働く可能性のある県北病院を見学することが出来たのは良い機会であった。個人的には研修先で質問などを多く出来たことも人数が少ないことのメリットだったのではないかと感じる。今回地域医療に求められる医師像を学ぶことが出来たので今後に活かしていきたい。

熊本大学4年

今回の冬季実習では、防災というのは普段の業務と繋がっているということ、技術を身につけた上で患者中心の医療をどう行うかということ、高齢者施設が多くの問題を抱えていること、そして、玉名地域の素敵なところをたくさん知ることができました。実習中に自分から質問をしたり、地域医療を支えている先生方とたくさんお話をしたりすることができ、とても有意義な時間を過ごせたと思います。私は今回の実習を通して、働く地域の良いところをたくさん見つけ、患者さんや医療スタッフなど、関わる多くの人とのつながりを大切にできる医師になりたいと思いました。

熊本大学2年

今年度の実習は、この冬季実習で2回目の参加となり、貴重な機会をいただけてとてもありがたいです。県北地域は訪れたことがなく、気候や交通もどうなっているのかあまり馴染みがなかったので、玉名、和木地域について調べるきっかけになりました。まず、有明保健所の服部先生のお話は医師が災害時にどのような立場で動くのかなど、今まであまり気にしたことがなかったテーマで勉強になりました。病院での治療ばかりでなく、非日常なことが起こった時、住民を支援する組織や過程が分かりました。県北病院では、患者さん中心の医療がテーマで、地域では特に、病気だけでなく患者さんの生活まで見通した治療ができる医師の必要性が分かりました。総合診療では、なぜその科を選んだのか、何が大変かも、聞いてみたいと思いました。

4 教員・外部講師コメント

熊本大学教職員

地域医療支援センター 特任講師 高柳 宏史

夏季・冬季地域医療特別実習、皆さん、お疲れさまでした。

毎年参加させていただいていますが、今年の夏季の実習地域である水俣・芦北地域には個人的にも思い入れのある地域です。前回、水俣・芦北地域で地域医療特別実習を実施したのは2018年になります。当時は実習を企画・計画する担当教員として関わっていました。2泊3日の実習ということもあり、熊本県水俣病保健課、熊本県芦北地域振興局、水俣市環境課など多くの関係者を巻き込んだものでした。企画者でしたが、準備や実習を通して水俣病の問題が多分野にまたがることを学び、医師として大学教員として大変貴重な経験となりました。今後、関係者もいなくなり、水俣病問題もいつかは語られなくなってしまうと思いますが、多くの学びをこの水俣病問題からは得ることができます。水俣病のことをどう学べばよいかわれた方は、石牟礼道子さんの著書「苦界浄土」を手に取って読んでみてもらえたらと思います。

最後に、今回の実習を支えてくださった関係者の皆さまに改めて御礼申し上げます。

地域医療・総合診療実践寄附講座 特任助教 佐土原 道人

2025年の夏季は芦北・水俣地域、冬季は玉名地域で行われました。これまでの開催地も概ね県下の2次医療圏を一巡しました。コロナ禍で一時中断後の実習も2023年度から構成の見直し、ICTや情報端末の活用で、1泊2日で以前と同じ内容をコンパクトにまとめることが可能となりました。夏季と冬季の2回開催も定着し、未参加の学生が減りました。これまでのワークブックを使った事前学

習に加え、行政の資料をもとにした反転授業形式、地域へのコミットメントを高めるツールとしての「フォトボイス」、フィールドワーク体験を作品で表す「肥後狂句」も取り入れるなどの工夫もしました。今回の夏季実習では、施設利用者に「フレイル」について学生が紙芝居形式で分かりやすく説明する試みも行いました。

私は、2017年に当寄附講座に任じて以来、本実習の運営に携わってきましたが、転勤に伴い今年度が最後の参加となります。赴任先の新設講座でも地域医療実習を担当します。これまでの経験を活かしてより良いものに発展させる所存であります。同時に、本地域医療特別実習が、今後も学生が主体性と自立性を持って楽しんで参加できるよう発展を希望します。

最後に、夏季及び冬季特別実習に際し、企画立案からご協力をいただいた各方面の方々、実際の現場でもご協力いただいた方々に、心より感謝申し上げます。

地域医療支援センター 特任助教 堤 龍子

昨年度に引き続き、本年度も地域医療特別実習に参加いたしました。私自身、学生時代には毎年夏季実習に参加しておりましたが、今回実施した水俣地域および玉名地域は、義務年限中に勤務の機会がなかったため、新たな発見や地域ごとの魅力を数多く感じる機会となりました。

実習の大きな目的は「その地域を知ること」にあると思います。1泊2日という短い期間ではありますが、医療機関のみにとどまらず、実際に地域を訪れ、見て、聞いて、味わい、五感で感じたことは、今後も記憶に残る貴重な経験となるはずです。また、熊本大学と自治医科大学の学生が協力しながら実習を進めることで、親交を深める良い機会にもなったと思います。こうしたつながりが、将

来それぞれが医師として地域医療に携わる際に、お互いを支え合う関係性の礎になることを期待しています。私自身も、学生時代の夏季実習で得た地域での思い出や人とのつながりが、その後の義務年限を含む医師生活に大いに活かされたと感じています。学生の皆さんも何か一つでも持ち帰るものがあれば、それだけで忙しい時間を縫って実習に参加した大きな意義になると思います。

最後に、実習の実施にあたり多大なご支援を賜りました医療機関や行政の皆さま、地域の皆さまに心より感謝申し上げます。計画段階から多くのご協力をいただき、まことにありがとうございました。

地域医療・総合診療実践寄附講座 特任助教 北村 泰斗

夏季特別実習は今回で3回目の参加となりました。事前学習に始まり、水俣・芦北でのフィールドワーク、懇親会、発表準備、そして最終発表まで、42名の熊大生と自治医大生が一体となり、先輩から後輩へと活動を伝承しながらわきあいあいと取り組んでおられました。フィールドワークでは、地域の歴史や風土、公害の経験を乗り越えてきた歩み、そして現在の保健・医療・福祉の取り組みに直接触れ、水俣・芦北地域に根ざした自身の医師像をイメージする良い機会となっていたのではないのでしょうか。フォトボイスや発表準備の過程では、地域の魅力だけでなく課題にも目を向け、自分たちが将来どのように地域と関わっていくのかを真剣に語り合う姿が印象的でした。本実習が、楽しみながら、地域を知り、志を同じくする仲間と出会う機会として今後も発展していくよう、工夫を重ねていきたいと思います。実習を温かく支えてくださった行政、医療・福祉機関、そして地域の皆さまに心より御礼申し上げます。

総合診療科 医員 松田 圭史

この度は令和7年度の夏季・冬季地域医療特別実習にスタッフとして参加させていただきました。夏季は水俣芦北地域、冬季は玉名地域での実習となり、それぞれ異なる地域特性や医療課題に触れる貴重な機会となりました。私自身、学生時代に熊本県医師修学資金賞与生として本実習に参加しましたが、医師となった今、指導的立場で関わることで、学生時代とは異なる視点から地域医療を捉えることができ、大変多くの学びを得ました。

学生にとっては、将来地域で医師として働く姿を具体的に想像することは容易ではないかもしれませんが、本実習は「地域を知る」第一歩として非常に意義深いものであったと感じています。また、地域住民の方々や地域医療に携わる多職種、地域枠の他の学生、自治医科大学の学生との交流は、将来の医療者としての視野を広げる貴重な経験になったはずでした。

この実習で得た経験を糧に、今後さらに地域医療について考えを深め、それぞれの地域で医師として活躍されることを心より期待しています。私自身も後輩たちに刺激を受けながら研鑽を重ね、今後も何らかの形で熊本の地域医療に貢献していきたいと考えています。

最後になりましたが、本実習を企画・運営してくださった関係者の皆様、ならびにご協力いただいた地域の皆さまに心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

総合診療科 医員 田添 英典

今回、外部講師として、芦北・水俣地域での夏季地域医療特別実習に参加させていただきました。実習に参加するのは初めてでしたが、医学生の皆さんと行動を共にする中で、私自身も大きな学びを得ることができた有意義な2日間となりました。私はD班の皆さんとともに、津奈木町役場、特別養護老人ホーム、つなぎ美術館を見学しました。津奈木町役場では、職員の方々から地域復興に対する熱い思いや、人口減少や高齢化といった地域が抱える課題についてのお話を伺い、地域医療の役割について考える貴重な機会となりました。私はD班の皆さんとともに、津奈木町

役場、特別養護老人ホーム、つなぎ美術館を見学しました。津奈木町役場では、職員の方々から地域復興に対する熱い思いや、人口減少や高齢化といった地域が抱える課題についてのお話を伺い、地域医療の役割について考える貴重な機会となりました。私が学生のとき、宮崎県椎葉村で地域医療に携わっていた先生から「地域医療を志す医師は、ジェネラリストであると同時に、その地域についてのスペシャリストでなければならない」と教わったことがあります。今回、津奈木町の方々と直接言葉を交わし、地域固有の課題について考える中で、その言葉の意味を改めて実感することができました。このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

学外講師

熊本県健康福祉部健康局医療政策課 課長補佐 小山 耕太

「地域医療の本質を学ぶ貴重な機会」

今回、令和7年12月23日に実施された冬季地域医療特別実習に外部講師として参加させていただき、熊本大学医学部地域枠学生の皆さんとともに、有明保健所およびくまもと県北病院を訪問いたしました。

有明保健所の服部所長からは、災害時保健医療福祉活動におけるマネジメントについてご講話いただきました。特に印象的だったのは、「災害は非日常ではなく、日常の延長である」という言葉です。熊本地震や令和2年豪雨災害、能登半島地震でのDHEAT活動の経験を通じて、平時からの地域連携が有事の対応力に直結することを具体的に学びました。災害時こそ、地域の医師がリーダーシップを発揮し、行政との連携を図ることの重要性を、学生の皆さんも真剣に受け止めていたように思います。

くまもと県北病院では、総合診療科の中村孝典先生のご指導のもと、「患者中心の医療」をテーマにグループディスカッションを行いました。実際の症例を基に、患者に寄り添う医療のあり方について深く考える機会となりました。

今回の実習では、かつての部下が地域医療実習のリーダーとして活躍している姿を目の当たりにし、本県の地域医療を支える人材が着実に育っていることを実感いたしました。

本実習が、学生諸君にとって地域医療の本質を理解し、将来の医師としての使命感を深める実り多い機会となることを期待しております。

熊本南病院 総合診療科 医師 松岡 隼平

総合診療科医師で熊本県医師修学資金貸与医師8年目の松岡隼平です。この度は令和7年度の夏季地域医療特別実習で、水俣地域を訪問させていただきました。毎年、熊本県内の様々な地域を学生と共に訪問させていただいていますが、将来地域医療従事医師として働く上で、本当に重要な実習だと改めて実感しています。

今回周らせていただいた水俣地区は、医療過疎地域がかなり深刻化しており、地域中核病院である水俣市立総合医療センターから、地域枠出身医師の臨時的派遣で成立しているという実態を目の当たりにしました。また、久木野・寒川地区の代々伝わる棚田で獲れる米を活用したカレーを売りにしたカフェや、オンライン販売など、地元の特産品を活かした村おこしなども頑張っておられる様子でした。他にも、水俣病の生き字引である方の講演を聞いて、現在も続く賠償金の返済や、病気を背負い生き続けている人々の実態、当時の状況など、決して過去の話ではない生々しい現実を実感しました。地域特色の強い疾患背景などを理解して診療に関わることも、個々の疾病だけでは無く地域という視点で医療に携わるという総合診療医、地域医療従事医師に必要なとされる能力だと感じました。

やはり、地域医療は一にも二にも実際の地域に身を置いて現状を知ることだと思います。医師としての基盤を学んでからは、地域枠の後輩の先生たちには是非積極的に地域に飛び込み、ハードスキルとしての地域医療を学んでいってもらいたいと感じました。

天草市立河浦病院 総合診療科 医師 足立 瑛彦

今回、私は夏季地域特別実習に参加し、水俣市と芦北町における医療面の特色(特に地域の医療機関で可能な医療行為と不可能な医療行為)及びその解消の手段について考察した。水俣市立総合医療センターでは鹿児島県から来る入院患者を受け入れたり、5事業に力を入れるなど、熊本県南部の主要な医療機関として機能している面が垣間見られたが、一方で放射線治療をするには隣県(出水市)まで行く必要があったり、産科医の数が熊本市医療圏に比して著しく少ないなど、医療センター単体で全ての医療行為を行うには限界があるようにも思われた。現在、私が勤めている河浦病院も、医療資源の限界といった水俣市立総合医療センターと共通した課題を抱えており、「くまもとメディカルネットワーク」への参加で医療情報を共有したり、井上病院・医院を訪問時に教わった、「医師同士のつながりを大事に」することが、医療資源の少ない地域で医療行為を行う上での課題解決について、手がかりを示唆しているように思えてならない。

5 その他

・ 地域医療特別実習に関する業績

- ・ 第11回九州地域医療教育研究会 2025年5月10日 長崎市 (抄録)

「コロナ禍後の地域医療特別実習の再構築－効率化と学修効果の両立」
佐土原道人、北村泰斗、高柳宏史、松田圭史、堤龍子、荒木智、松井邦彦
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
熊本大学では、熊本県修学資金貸与学生、熊本県出身自治医科大学学生などを対象に、「地域を知る」ことを目的に合宿形式の地域医療特別実習を行ってきた。コロナ禍による一時中断を経て、内容と行程を整理・見直し、夏季2泊3日から、夏季・冬季の1泊2日へと再構築した。フィールドワーク（医療・福祉、行政、産業、観光、生活の場）を維持しつつ、学修ガイド（手引きとワークブック）の活用と学生の作業や発表のオンライン化を行い、反転学修（事前学習の内容から訪問先で質疑）を導入した。体験や暴露を作品として表現する試み（フォト・ボイス、肥後狂句）により省察の促進を図った。実習後アンケートでは、学生の実習に対する全般的評価および自己評価（参加度合い、楽しめたか、地域を知ることができたか）において例年と同水準の高評価が得られた。これらの変更の取り組みは、新たな実習モデルとして、効率化と教育効果の両立が可能であることが確認された。

- ・ Society of General Internal Medicine 2025 in Hollywood

TITLE: UTILITY OF POETRY AS A REFLECTIVE LEARNING TOOL IN RURAL COMMUNITY-BASED EDUCATION FOR MEDICAL STUDENTS

M. Sadohara , T. Kitamura , K. Matsui. General Medicine and Primary Care, Kumamoto University Hospital, Kumamoto, Japan.

SETTING AND PARTICIPANTS: Medical students participated in a two-day rural logging trip as a part of an extracurricular community-based learning program. This program aimed to motivate students and enhance their engagement with the community.

DESCRIPTION: Although poetry has been used in art therapy, speech and language therapy, and entertainment during medical training, the role in community-based medical education remains underexplored. In the 2024 program, we implemented poetry sessions to encourage deeper reflection on scenes encountered during the fieldwork. We selected higo-kyoku as the poetic form - a type of haiku consisting of three-line, using colloquial local dialect and often emphasizing satire and humor. The utility and effectiveness were assessed through a questionnaire, which included items rated on five-point Likert scale items and free-text responses. The analysis focused on educational impact, feasibility, enjoyability, novel realization, deeper insights, and regional perspectives. The poems were categorized based on the of Community as Partner model's eight subsystems to identify key themes.

EVALUATION: Of 27 medical students, 32 poems were collected. The top three scenes were safety and transformation (8 poems), health and social services (7 poems), and physical environment (6 poems). From the questionnaire, mean scores (1=Never to 5=Very much) rated by students were feasibility of 2.2 ± 0.7 ; enjoyability of 4.1 ± 0.8 ; novel realizations of 3.8 ± 1.0 ; deeper insight of 3.8 ± 0.9 ; regional perspectives of 4.1 ± 1.0 . The scores of overall effectiveness on community-based medicine were rated 3.8 ± 0.8 by students and 4.1 ± 0.7 by faculty and staffs. Free-text responses highlighted the poetry's value in enhancing reflection and understanding local culture. By condensing their thoughts in concise phrases, students organized their experiences and gained insights. Using of local dialect fostered engagement more deeply with the community (e.g., local language, culture), increasing familiarity and interest. Some student noted technical difficulty composing poetry (e.g., mastering dialect, constraints of brief poetic format). Nevertheless, they acknowledged its role in promoting mutual understanding between healthcare providers and community residents.

DISCUSSION / REFLECTION / LESSONS LEARNED: Incorporating a poetry session alongside fieldwork promote deeper reflection on students' experiences and fosters engagement with rural community thought the creative process of composing poetry. Despite technical challenges in composing, the poetry encouraged students to explore perspectives beyond healthcare and connect with local culture. This approach provides valuable insights into the realities and familiarization with the local community, particularly for future healthcare professionals. With appropriate guidance, poetry session is an easy and enjoyable tool for community-based medical education.

- ・ UTILITY OF PHOTOVOICE AS A TOOL FOR REFLECTIVE LEARNING IN RURAL COMMUNITY-BASED LEARNING FOR MEDICAL STUDENTS

Taito Kitamura, Michito Sadohara, Kunihiro Matsui. General Medicine and Primary Care, Kumamoto University Hospital, Kumamoto, Japan.

SETTING AND PARTICIPANTS: The participants were medical students who joined a two-day extracurricular logging trip to a rural area as a part of a community-based learning initiative. This program aimed to motivate students who have scholarships with rural obligation in the future and enhance their engagement with the community.

DESCRIPTION: In the 2024 program, we implemented photovoice, a visual participatory research method, which enables participants to express their lived experiences through photographs and accompanying written narratives. To encourage deeper reflection on scenes encountered during the fieldwork, a photovoice session was conducted. The utility and effectiveness were assessed through a questionnaire including items rated on five-point Likert scale items and free-text responses addressing the overall educational impact, feasibility, enjoyability, novel realization, and deeper insights. The student works were categorized based on the Community as Partner model's eight subsystems to identify significant community-focused themes. EVALUATION: Of 27 medical students participated, 33 works were collected. Categorization by the eight subsystems revealed the top three scenes were health and social services, safety and transformation, and economics (11 works each). From the questionnaire, mean scores (1=Never to 5=Very much) rated by students were feasibility of 2.9 ± 0.5 ; enjoyability of 4.0 ± 0.9 ; novel realizations of 4.0 ± 1.0 ;

deeper insight of 4.0 ± 1.0 . The scores of overall effectiveness on community-based medicine were rated 4.3 ± 0.8 by students and 4.0 ± 0.8 by faculty and staffs. Free-text responses, they highlighted the advantages as enhanced observation and perspectives (e.g., attention to fine details and distinctive features to the community), deeper reflection and review (e.g., an opportunity to organize and reflect on experience), and communication and sharing, though the process of selecting the photos, verbalization the thought, and sharing experiences. However, some student noted the areas for improvement, such as limited time to elaborate their works.

DISCUSSION / REFLECTION / LESSONS LEARNED: Incorporating photovoice session alongside fieldwork suggests that the tool promote deeper reflection and engagement through the process to select photos, verbalize thoughts, and share their lived experiences. Unlike traditional fieldwork, photovoice fosters broader exploration of perspectives extended beyond healthcare. Given that these students may be assigned to rural area in the future, this approach provides valuable insights into the realities and current conditions of rural communities. When implemented with appropriate guidance, photovoice is easy and enjoyable tool and has the potential to serve as a powerful tool in community-based education.

おわりに

令和7年度夏季および冬季に実施しました「地域医療特別実習」にあたり、多大なるご支援を賜りました国保水俣市立総合医療センター、くまもと県北病院をはじめとする医療機関の皆様、ならびに水俣市、芦北町、津奈木町、玉名市、和水町の各施設、行政機関の皆様方に、心より感謝申し上げます。

本実習は、熊本県医師修学資金貸与学生および熊本県出身の自治医科大学医学部生を対象に、「地域を学び、地域医療への理解を深める」ことを目的として開催しております。近年は学生の学びの機会を最大限に確保するため、従来の夏季に加え、冬季実習も定着いたしました。今年度は皆様のご協力のおかげで、全対象学生が地域医療の最前線に身を置く機会を得ることができました。

今年の実習では、地域の基幹病院の見学や水俣・有明保健所長からの講話をはじめ、フィールドワークを通じて診療所や高齢者施設、さらには地域振興・まちづくり関係施設の見学を実施いたしました。また修学資金貸与医師の先生より地域の医療の特色や課題について直接伺う貴重な機会もいただきました。学生たちにとって、地域医療の現場を肌で感じ自らの将来像を描くための貴重な機会になったと思います。

今後も学生たちが地域医療に対して高い関心を持ち続け、将来、熊本県の地域医療を担う人材へと成長できるよう、本実習をさらに充実させていきたいと考えております。今後とも、変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院
地域医療支援センター 副センター長
地域医療・総合診療実践学寄附講座 特任教授
荒木 智

• **熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター**

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1 外来棟4階
TEL：096-373-5627 FAX：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
ホームページ：https://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/



• **熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座**

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1 外来棟4階
TEL：096-373-5794 FAX：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
ホームページ：https://kumadaisoushin.com/

